資料紹介

多久邑主多久家の墓碑

秋　元　茂　陽

はじめに

筆者は、四〇年ほど全国各所に建立されている皇族、大名、公卿、華族など著名家の墓所を調査、研究しているが、今回、龍造寺家の後裔である多久家の墓碑、墓制を、鍋島四藩主家、御一門家、御親類家との相違を含め報告したいと思う。村中龍造寺家の二十代隆信は、「肥前の熊」と称され最盛期を築いたが、慶長十二年（一六〇七）二十二代高房の死去により龍造寺家の嫡流は絶えることになる。隆信の弟で水ヶ江龍造寺家の四代長信は、多久地方に封じられ、その後、鍋島家の国政後も長信の長男家久（安順）は、佐賀藩の筆頭家老として多久領二一七〇〇石を継承し、明治維新を迎えている。

一　多久家の菩提寺

多久家の邑主と正室の墓碑が建碑された寺院は、大應山圓通寺（佐賀県多久市西多久町板屋七〇四七）、般若山慶聞寺（佐賀県佐賀市本庄町鹿子二七）、慶聚山龍雲寺（佐賀県佐賀市八戸一－六－三五）と東京の青山霊園で、現存する墓碑は、圓通寺に三十基、慶聞寺に二十六基、龍雲寺に五基である。その他、長榮山宝蔵寺（佐賀県多久市東多久町別府六四六一）に、四代茂文生母蓮の、石州山地福寺（佐賀県多久市多久町七五五三）に、七代茂堯長女林の墓碑が建碑されており総墓碑数は、この二基を加えた全六十三基である。宗旨は、圓通寺、慶聞寺、龍雲寺、地福寺が曹洞宗、宝蔵寺は日蓮宗である。林の墓碑は、圓通寺と地福寺の両寺に建碑されているが、亡骸は西ノ原梅ヶ溪（西ノ原大明神）に納められたと言われている。地福寺の梶原泰信師によると、「当寺が林が自害された場所（松山神社）から一番近い寺であったため、その場所の方角を見渡すように墓碑が建碑されたと云う言い伝えもあるようです」とご教示いただいた。

二　多久家の墓制

菩提寺の変更

多久家歴代邑主の葬地は、初代安順から六代茂明までは佐賀の慶聞寺、七代茂堯から十一代茂族までは多久の圓通寺、明治以降の十二代乾一郎から十四代皓一郎までは、青山霊園であることから二度、葬地が変更されたことになる。江戸期の途中で、同地内において藩主の葬地が変更されることは、徳川将軍家や萩藩毛利家など、特に複数の菩提寺を併用する家に多く見られるが、多久家のように江戸中期以降に、併用ではなく完全に変更

される事例は、徳島藩蜂須賀家など数例見られるだけで、極めて異例であると言える。初代安順が死去した寛永十八年（一六四一）当時、すでに圓通寺と慶闇寺とも菩提寺になっていたが、安順は慶闇寺に埋葬されている。これは、安順の父長信と同室（安順生母）が慶闇寺に埋葬されたためと考えられるが、以降、六代茂明までの歴代邑主夫妻が埋葬されている。しかし、七代茂堯は、長信以降、父茂明まで埋葬された慶闇寺ではなく圓通寺に埋葬され、以降、圓通寺には十一代茂族までの歴代邑主夫妻が埋葬されることになる。蜂須賀家は、新たに儒教を帰依し仏教との併用になったことが要因であるが、多久家に関しては両寺とも曹洞宗である。明治以降、多久から青山霊園へ変更されたのは、東宮侍従、式部官などを歴任した乾一郎が東京在住となり、更に仏教から神道へ改宗したことが要因と考えられる。

城下佐賀から領地多久へ

多久家の墓制において、江戸中期に邑主と正室の葬地が完全に変更されたことは、極めて異例であると記したが、更に注目すべきは、その立地が藩公の城下内である佐賀から、領地の多久へと変更されたことである。初代安順は多久で死去したが佐賀に、十一代茂族は佐賀で死去したが多久に埋葬されているため、必ずしも死亡地の菩提寺に埋葬されてはいない。新たに邑主夫妻の葬地となった圓通寺は、多久における菩提寺ではあるが、最初に同寺に埋葬されたのは、宝暦六年（一七五六）に死去した四代茂文の息女以久で、次が七代茂堯である。つまり、茂堯の墓碑が圓通寺に建碑されるまで同寺には、以久の本墓と、長信と二代茂辰室の供養塔の三基しか建碑されていなかったことになる。一方、慶闇寺には、長信から茂明までの歴代邑主夫妻のほか、多くの婦女子が埋葬されている。

多久家歴代葬地の変遷を総括すると、初代安順から六代茂明までは、邑主、正室、婦女子ともに何処で死去しても、すべて佐賀城下の慶闇寺に埋葬されたが、代茂堯以降は、邑主と正室だけは、何処で死去しても領地多久の圓通寺に埋葬されたが、婦女子だけは圓通寺に限定されることなく、佐賀と多久の両寺院に分葬されていることが大きな相違である。茂堯以降、夭折した全子女の死亡地が不明であるため断定はできないが、死亡地の菩提寺に埋葬されたものと思われる。

三支藩家と他藩家老家との相違

では、多久家と鍋島四藩主家との墓制では、どのような相違が見られるのであろうか。四藩主家では、各家とも肥前領内と江戸に各菩提寺を持っているが、多久家では江戸には無く肥前領内の佐賀と多久だけである。三支藩家の藩主が埋葬されたのは、蓮池藩は蓮池に、小城藩も小城に、鹿島藩も鹿島で各領地内だけであるが、多久家では当初、初代父長信以降、佐賀城下内に埋葬されていることからも、異なる独自の墓制を確立していたと言える。他の御親類同格家でも、武雄鍋島家、諫早諫早家、須古鍋島家の各当主の墓碑は、領地内の菩提寺だけで佐賀城下内には建碑されていない。

鍋島家と同様、大藩の御一門家でも、萩藩毛利家の吉敷毛利家、右田毛利家、阿川毛利家、厚狭毛利家とも萩城下内には、仙台藩伊達家でも岩出山伊達家、登米伊達家、亘理伊達家でも仙台城下内には邑主の墓碑は無く、全国各所の大名家、御一門家の墓所を踏査した筆者から見ても、多久家の事例は異例であると言える。

三　多久家の墓形の変遷

邑主と正室の墓形

肥前領内における墓碑の総合的な考察においては、四藩主家のほか各御一門家の墓制とともに重要なのが墓形の種別で、墓制と墓形の変遷を分析することにより、肥前領内における各家の特徴が把握できるのである。最初に、歴代邑主の本墓と供養塔の墓形を見ると、長信は慶闇寺では五輪塔墓、圓通寺では笠塔婆墓、初代安順は慶闇寺・龍雲寺ともに五輪塔墓、龍雲寺の茂富は五輪塔墓、慶闇寺の二代茂辰、三代茂矩、四代茂文、六代茂明は、四邑主とも五輪塔墓、七代茂堯は圓通寺では長方形墓、慶闇寺では五輪塔墓、圓通寺の八代茂孝、九代茂鄰、十代茂澄、十一代茂族の四邑主とも長方形墓、十二代乾一郎は青山霊園では不詳、圓通寺では長方形墓である。青山霊園に建碑されていた多久家の墓所は、戦後の昭和三十三年に改葬され旧石が廃棄されたため、乾一郎の墓形は不明であるが、新設された合祀墓と同形の角石墓であったと思われる。また、改葬後に死去した十三代龍三郎と十四代皓一郎は、合祀墓に納骨されたために、当初より個人の墓碑は新設されていない。

寺院別に墓形を見ると、圓通寺では長信が笠塔婆墓、七代茂堯、八代茂孝、九代茂鄰、十代茂澄、十一代茂族、十二代乾一郎は長方形墓、慶闇寺では長信、初代安順、二代茂辰、三代茂矩、四代茂文、六代茂明、七代茂堯は五輪塔墓、龍雲寺では安順、茂富とも五輪塔墓である。寺院別の統計を見ると、佐賀の慶闇寺と龍雲寺では五輪塔墓を、多久の圓通寺では長方形墓を夫々踏襲し、主墓形としていることがわかる。

次に、各正室の本墓と供養塔の墓形を見ると、慶闇寺の長信室は五輪塔墓、初代安順室は慶闇寺・龍雲寺とも五輪塔墓、龍雲寺の茂富室は五輪塔墓、二代茂辰室は慶闇寺・圓通寺とも五輪塔墓、慶闇寺の三代茂矩室、四代茂文室、六代茂明室は五輪塔墓、圓通寺の九代茂鄰室、十一代茂族室は長方形墓、十二代乾一郎の先室は青山霊園で不詳、同継室は青山霊園が不詳、圓通寺は長方形墓である。寺院別に見ると、圓通寺では二代茂辰室が五輪塔墓、九代茂鄰室、十一代茂族室、十二代乾一郎継室は長方形墓、慶闇寺の長信室、初代安順室、二代茂辰室、三代茂矩室、四代茂文室、六代茂明室は五輪塔墓、龍雲寺の初代安順室、茂富室は五輪塔墓、青山霊園の十二代乾一郎の先室と継室は、すでに旧石が廃棄されているため不詳であるが、角石墓であったと思われる。各正室の墓形を見ると、邑主と同様に多久の圓通寺では長方形墓が、佐賀の慶闇寺と龍雲寺では、五輪塔墓が主墓形として踏襲されていることがわかる。

宗旨と墓形の関連性

肥前領内における四藩主家の各菩提寺の宗旨を見ると、佐賀本藩の高傳寺と善應庵とも曹洞宗、蓮池藩の宗眼寺は曹洞宗、小城藩の星巌寺と玉毫寺とも臨済宗黄檗派（現・黄檗宗）、鹿島藩の普明寺は臨済宗黄檗派、泰智寺は曹洞宗である。国許と江戸において、藩主、正室、婦女子の墓形が、五輪塔墓に踏襲された完全統一形式をとる佐賀本藩の高傳寺と善應庵、蓮池藩の宗眼寺の宗旨が三箇寺とも曹洞宗であることから、二藩主家においては肥前領内での墓形が、曹洞宗＝五輪塔墓と言う図式が成り立つことになる。そのため邑主と正室だけではあるが、多久家も初代から六代までは五輪塔墓を建碑し、佐賀本藩の完全統一形式を踏襲していたことになる。

一方、五輪塔墓の完全統一形式をとらなかった小城藩の宗旨は、二箇寺とも臨済宗黄檗派、鹿島藩は曹洞宗と臨済宗黄檗派の併用であるが、鹿島藩の曹洞宗泰智寺では、佐賀本藩と蓮池藩と同様に五輪塔墓の完全統一形式である。また、二箇寺とも臨済宗黄檗派の小城藩では、数基ではあるが五輪塔墓も見られるが、鹿島藩の黄檗派普明寺では一基も建碑されていない。本来、曹洞宗と臨済宗は、ともに禅宗であることから小城藩では、黄檗派の両寺院でも鍋島家の主墓形と言える五輪塔墓を、完全に排除することができなかったと思われる。

では、肥前領内で完全統一形式をとる佐賀本藩と蓮池藩以外の御一門家や御親類家においても、この曹洞宗＝五輪塔墓という図式は、該当するのであろうか。多久家の菩提寺は、圓通寺、慶闇寺、龍雲寺とも曹洞宗で、同家が帰依する菩提寺に臨済宗寺院は見られない。実際、佐賀の慶闇寺と龍雲寺では、邑主と正室の墓形はすべて五輪塔墓であるが、多久の圓通寺では、二代茂辰室の供養塔のみ五輪塔墓で、他はすべて長方形墓である。曹洞宗＝五輪塔墓の定義は、佐賀城下外の蓮池と鹿島でも該当するが、多久においては、当てはまらないことになる。ただ、御親類同格家の須古鍋島家、武雄鍋島家、諫早諫早家の宗旨は、三家とも曹洞宗の単独で、墓形も五輪塔墓の完全統一形式が踏襲されている。また、横岳鍋島家の曹洞宗真龍寺でも、五輪塔墓が踏襲されているが、佐賀城下より最も遠く離れた飛地深堀（長崎県長崎市深堀）では、深堀鍋島家の曹洞宗菩提寺（寺名）に五輪塔墓は、一基も建碑されていない。これら各所の鍋島御一門家を見ても、曹洞宗寺院においては五輪塔墓が主墓形であり、深堀が飛地であることを考慮すると、改めて多久家の墓制が異例であることがわかる。

各墓形の建碑率

各寺院における墓形別の総数を見ると、圓通寺では、長方形墓が二十六基、角石墓が一基（青山霊園からの移転墓）、五輪塔墓が一基、笠塔婆墓が一基、仏像形墓が一基の計三十基、慶闇寺では、五輪塔墓が十三基、長方形墓が八基、笠塔婆墓が五基の計二十六基、龍雲寺では、五輪塔墓が四基、笠塔婆墓が一基の計五基、宝蔵寺では、笠塔婆墓が一基、地福寺では、長方形墓が一基である。全六十三基を墓形別に分類すると、長方形墓が三十五基、角石墓が一基、五輪塔墓が十八基、笠塔婆墓が八基、仏像形墓が一基である。最も多く建碑されたのが長方形墓で三十五基、次に五輪塔墓の十八基で、ともに多久と佐賀における主墓形である。その全体比率を見ると、長方形墓が57％、五輪塔墓が29％であるが、長方形墓を多久の圓通寺に限定すると90％、五輪塔墓を佐賀の慶闇寺と龍雲寺の両寺に限定すると55％になり、更に比率が上昇することになる。ただ、佐賀における五輪塔墓の比率が、あまり高くはないが、邑主と正室に限定すれば、長信夫妻も含み100％になる。一方、圓通寺における邑主と正室の長方形墓の建碑率は82％であるが、これは長信と二代茂辰室の供養塔も含まれているためで、本墓に限定すると100％になる。

童子・童女の墓形の変遷

次に、邑主と正室以外の婦女子の墓形を見ると、圓通寺では十八基が建碑されているが、茂堯女林の墓碑のみ仏像形墓で、他の十七基はすべて長方形墓である。これは、林が非業の死を遂げているため、故意に異なる墓形を建碑したものと考えられる。慶闇寺では、全十三基が建碑されているが、長方形墓が八基、笠塔婆墓が五基である。法号の最後につけられる位

号[1]により分類すると、圓通寺における全十七基（十七霊）の内訳は、居士墓が二基、大姉墓が三基、童子墓が八基、童女墓が四基、慶闇寺における全十三基（十三霊）の内訳は、居士墓は長方形墓が三基、笠塔婆墓が一基、大姉墓は笠塔婆墓が一基、童子墓は長方形墓が三基、童女墓は長方形墓が二基、笠塔婆墓が三基である。位号は各宗旨、宗派により多少の違いが見られるが、概ねの没年齢は、三歳位までの男子が嬰子、女子が嬰女、五歳位までの男子が孩子、女子は孩女、十五歳位までの男子は童子、女子は童女で、成人（元服）した男子は居士、女子は大姉で種別されている。

圓通寺では、林以外の全婦女子の墓碑は、規模の相違は見られるが、邑主・正室と同形式の長方形墓に統一され踏襲されているが、慶闇寺では、長方形墓と笠塔婆墓に種別されている。また、佐賀における邑主と正室の墓形である五輪塔墓は、多久、佐賀ともに婦女子の墓形としては、一基も建碑されていない。佐賀においては、慶闇寺に長方形墓が八基、笠塔婆墓が五基、龍雲寺では笠塔婆墓が一基であるが、多久において林の墓碑以外は、すべて長方形墓に統一されている。佐賀では、婦女子全体を対象にしても、夭折した童子と童女だけを対象にしても、ともに長方形墓と笠塔婆墓が併用されている。

では、佐賀において長方形墓と笠塔婆墓は、どのような基準により種別されたのであろうか。童子と童女全八霊の性別を見ると、長方形墓を建碑した五子女は、男子三霊、女子二霊、笠塔婆墓を建碑した三霊は、三霊とも女子であることから、笠塔婆墓は女子に限定された可能性が高いが、長方形墓は性別による種別ではないことがわかる。次に、墓形に関わらず没年が古い順に列記すると、大円は承応三年（一六五四）、幻清は寛文六年（一六六六）、柏意は享保七年（一七二二）、桂蕚は宝暦九年（一七五九）、心操は天明八年（一七八八）、春光は寛政五年（一七九九）、梅園は文化五年（一八〇八）、俊應は慶應元年（一八六五）である。これを墓形別に表記すると、笠、笠、笠、長、長、長、長となり、享保七年に夭逝した柏意までは笠塔婆墓を、その十七年後の宝暦九年に夭逝した桂蕚は長方形墓を建碑し、以降、幕末まで踏襲されていることから、その期間内に変更されたことがわかる。七代茂堯は、父で六代茂明までの歴代邑主夫妻の葬地を変更するが、その二人の没年を見ると、茂明が元文四年（一七三九）、茂堯は明和六年（一七六九）であることから、墓形が変更された期間と一致する。六代茂明の治世に夭折した柏意（茂明女）は笠塔婆墓を、七代茂堯の治世に夭折した桂蕚（茂堯女）は、長方形墓を建碑していることから推測すると、茂明の死後、茂堯の命により墓形が変更されたと考えられる。

六代茂明の治世までは、夭折した子女の葬地は慶闇寺に限定されたが、七代茂堯以降は、両寺に分葬されている。両寺には男女が、年代的にも満遍なく埋葬されていることから葬地選別の基準に関しては、不詳と言わざるえない。多久家の系譜には、死亡地の記載が無いため断定することはできないが、単純に佐賀で夭折した場合は慶闇寺に、多久で夭折した場合は圓通寺に埋葬されたのではないかと思われる。

居士・大姉の墓形の変遷

圓通寺での居士墓は二基、大姉墓は四基の計六基、慶闇寺での居士墓は五基、大姉墓は一基の計六基、地福寺では大姉墓が一基で、総計が全十二基となるが、林の墓碑が二基あるため十一霊となる。長方形墓を建碑したのは、圓通寺の柏樹軒、洞源院、春盛院、龍光院、江春軒の五基、慶闇寺では、大智軒、微笑軒、蓮泉軒の三基、地福寺の林の一基の計九基である。

圓通寺では、笠塔婆墓は一基も無く、慶闇寺の渭叟と蘭江の二基だけである。圓通寺で仏像形墓を建碑した林の墓碑を除く十一基は、童子と童女の墓碑と同様に、圓通寺では長方形墓に統一されているが、慶闇寺では笠塔婆墓と長方形墓が併用されている。

全十一霊の没年を見ると、笠塔婆墓を建碑した蘭江が元禄十四年（一七〇一）、渭叟が宝永二年（一七〇五）で、長方形墓を建碑した残り九霊すべてが、それ以降に死去しており、最も早く死去したのが四十六年後の宝暦四年（一七五四）慶闇寺に埋葬された微笑軒である。この期間は、前述の童子と童女墓とも重なることから居士と大姉墓に関しても、茂堯の命により変更されたと思われる。その茂堯の治世中の寛政二年（一七九〇）に死去し、圓通寺に埋葬された茂明の長女稲は、長方形墓を建碑していることから墓形の基準が、茂明の子女であるのか茂堯の子女であるのかではなく、変更された時期であると考えられる。稲の死去が、茂明の治世中であれば、長方形墓ではなく笠塔婆墓を建碑していたと思われる。

墓形変遷の総括

茂堯は、父茂明の死後、墓制の大改革を行なっている。初代父長信以降、歴代夫妻の葬地を、佐賀の慶闇寺から新たに多久の圓通寺に定め、墓形もそれまでの五輪塔墓から新たに長方形墓に変更している。邑主の葬地替えが江戸中期に行なわれたために前期と後期では、まったく異なる墓制を施行したことになる。邑主夫妻以外の婦女子の墓碑は、茂明までは葬地を慶闇寺に、墓形も邑主夫妻とは異なる笠塔婆墓に限定されたが、茂堯以降は葬地を限定することなく両寺院に分葬されたが、墓形は邑主夫妻と同形の長方形墓に限定統一されている。茂明までは、邑主、正室、婦女子の身分により墓形が種別されたが、茂堯以降は、墓形が長方形墓に統一されたために、その規模により種別されている。茂堯が行なった改革を見ると、佐賀本藩のほか多くの鍋島各家の宗旨曹洞宗の主墓形である五輪塔墓を廃し、二度と建碑しなかったことは、父茂明までの墓制を完全に覆し、全否定したとも言えるのである。多久家では当初、佐賀本藩の五輪塔墓の完全統一形式を踏襲し追随したが、その五輪塔墓との決別は、長年、本藩に対し不満を持つ茂堯の細やかな抵抗であったのかもしれない。

二基の例外墓

ただ、邑主と正室の墓形において、先の総括で寺院と年代が合致しないのが、圓通寺の二代茂辰室と、慶闇寺の七代茂堯の両五輪塔墓である。最初に、茂辰室の墓碑に関して検証すると、長信から六代茂明までの歴代邑主と正室は、すべて慶闇寺に埋葬され五輪塔墓が踏襲されているが、唯一、圓通寺に建碑された五輪塔墓が、この茂辰室の供養塔である。七代茂堯までは、圓通寺に埋葬された邑主と正室は一人もいないが、本墓ではなく供養塔でも六代茂明までは、五輪塔墓が建碑されたものと考えられる。同じく龍雲寺においても、安順と同室の供養塔は、ともに五輪塔墓である。ただ、なぜ茂辰室の供養塔だけが圓通寺に建碑されたのかは不明である。茂辰室は、佐賀本藩初代勝茂の息女であることが要因と考えられるが、初代安順室も本藩直茂の息女であるが、供養塔は建碑されていない。

邑主夫妻の墓形は、この七代茂堯以降、長方形墓に変更されるが、供養塔である茂辰室の墓碑は、当時の邑主夫妻の墓形である五輪塔墓が建碑されたが、茂堯の供養塔は長方形墓ではなく五輪塔墓が建碑されている。これは茂堯の墓碑が、死去した江戸期ではなく戦後に建碑されたためであ

る。

墓碑には、日蓮宗青陽山月蔵寺（大阪府堺市堺区柳之町東二―二―七）に埋葬されたが、昭和二十八年に慶閤寺へ分骨するに際し、同墓碑が新設されたことが刻字されている。本来であれば改葬納骨先は、慶閤寺ではなく圓通寺が筋であると言えるが、故意に避けたとも考えられる。その要因としては、すでに圓通寺には茂堯の墓碑が建碑されていたために、慶閤寺へ改葬し同寺における邑主の墓形である五輪塔墓が新設されたと考えられる。

四　佐賀型五輪塔墓

佐賀型の五輪塔墓とは

五輪塔墓を建碑したのは、圓通寺の二代茂辰室、慶閤寺の長信、同室、初代安順、同室、二代茂辰、同室、三代茂矩、同室、四代茂文、同室、六代茂明、同室、七代茂堯、龍雲寺の初代安順、同室、茂富、同室の全十八基（十五霊）で、邑主と正室の墓形が五輪塔墓に限定されていることから茂富夫妻も、邑主と正室に準ずると見られていたことがわかる。全十八基は、肥前地方に多く建碑されている佐賀型の五輪塔墓で、一般的な五輪塔墓と大きく異なる特徴が、笠（火輪）の形態である。通常の笠部は、四辺の軒下部分と四隅の軒先部分が、複雑な曲線で形成されているが、佐賀型には一切、曲線の部位が無く、すべて直線で形成されていることである。

慶閤寺の墓地に入ると、すぐ右側が邑主と正室の墓所で、横幅が二七・七m、奥行きが五・五mの四囲を石柵で囲まれた墓域内には、奥から33長信、34同室、35初代安順、36同室、37二代茂辰、38同室、39三代茂矩、40同室、41四代茂文、42同室、43六代茂明、44同室の順に、全十二基の墓碑が並建されている。墓域入口の向かって右側の石柱の内側には「水ヶ江龍造寺第十六世之孫」と、同左側の石柱の内側には「大正十五年十二月改修従五位男爵多久龍三郎」と刻字されている。

邑主夫妻の墓碑は、低い同基台[2]上に並建されており、長信夫妻以外の基台上には、枘穴[3]が残されていることから当初、覆屋[4]が設けられていたが、明治後に荒廃したため撤去されたものと思われる。各基台の横幅と奥行きは、長信夫妻墓が三一〇×二八〇（各cm）、初代夫妻墓は二九六×二七六、二代夫妻墓は三一三×二八四、三代夫妻墓は三一三×二八五、四代夫妻墓は三一三×二八三、六代夫妻墓は三一三×二八三で、初代夫妻の横幅がやや狭い以外、ほぼ同規模に踏襲建造されている。七代茂堯の墓所は、歴代の墓域外ではあるが、横幅が二六〇cm、奥行きが二六五cmで、正面に石門を、四囲には石柵を設けている。

墓碑は、各墓とも底部から地輪、水輪、火輪、風輪、空輪の五輪からなる同形式であるが、部位の形式により七代茂堯の一基と、他の十七基の二種に分類することができる。主形式であるⅠ型の十七基は、台石上に各輪（五輪）からなるが、Ⅱ型の茂堯の墓碑には、Ⅰ型には見られない上台石の頭部に反花[5]が彫刻され、台石と地輪の間に蓮華座[6]を設けていることである。同墓碑は、江戸期ではなく昭和期に新設されたものであるため、基本的なⅠ型に蓮華座などを付加し豪華さを演出したと思われる。

台石の段数は、寺院や年代などにより相違が見られるが、龍雲寺の四基には無く、慶閤寺の長信夫妻と初代安順夫妻の四基は一段、他の十基は二段である。ただ、龍雲寺の墓所は、明治以降に整備改修されたと思われることから、当初は台石が設けられていた可能性が考えられる。台石を持つ

Ⅰ型の十三基を見ると、一段の長信、同室、初代安順、同室と、二段の四代茂文と同室の六基は独立したものであるが、二代茂辰と同室、六代茂明と同室の四基は、上台石は独立しているが下台石は夫妻共有で、三代茂矩と同室は、上下二段とも夫妻共有であるため横幅の広い長方形である。台石の規模を見ると、長信夫妻、安順夫妻、圓通寺の23茂辰室の五基は、ほぼ正方形であるが、他の八基は横幅の広い長方形である。長信夫妻の横幅と奥行きは六〇cmほど、初代夫妻は五五cmで逆に小規模になるが、二代夫妻はやや大きくなり、三代夫妻以降は更に大きくなり、以降、三代夫妻の規格が基準となり、四代夫妻、六代夫妻へと踏襲されている。

慶闇寺の長信夫妻、初代夫妻、二代夫妻と、龍雲寺の59初代安順、60同室、61茂富、62同室、圓通寺の二代室の江戸初期に建碑された十一基の地輪を見ると、底部幅よりも頭部幅が広い逆台形であるが、三代夫妻以降は、頭部幅と底部幅が同規模となり、四代夫妻、六代夫妻に踏襲されており、年代による推移を確認することができる。逆台形の正面頭部と底部の各横幅を見ると、長信が五四・三×五三・一（各cm）、慶闇寺の初代は四九・七×四八・二であるが、二代は五六・五×五一・五、慶闇寺の二代室は五六・四×五一・五で大きく内部へと傾斜している。三代は五六・五×五六・五、四代は五七・二×五七・二で同規模となり、六代は五七・五×五七・〇で、逆に頭部幅が五㎜広く建造されている。慶闇寺に建碑された全十二基の横幅と奥行きを見ると、初代夫妻は四九cmほどであるが、二代夫妻、三代夫妻、四代夫妻、六代夫妻は五七cmほどと大きくなるが、長信夫妻は五四cmほどで初代夫妻よりも大きく建造されている。龍雲寺の四基は、初代夫妻が六〇cmほど、圓通寺の二代室は六二cmで、三基の供養塔は、慶闇寺の本墓よりも大きく建造されている。

碑銘刻字の変遷

碑銘は、各墓とも地輪に刻字されているが、ここでも年代による変遷を知ることができる。慶闇寺に建碑されたⅠ型の十二基を見ると、長信夫妻は、ともに正面に道号[7]と戒名[8]だけが、左側（向かって右側）から横表記されている。初代夫妻は、ともに正面に道号、戒名、位号を縦表記するが、同裏面には安順の官名[9]と俗名が縦表記され、同室は続柄だけが横表記されている。四基とも院号[10]と没年の刻字は無く、初代夫妻の墓碑には、長信夫妻には見られない位号と俗名などが付加されている。二代夫妻は、ともに正面に道号、戒名、没年が、三代夫妻は位号が付加され、ともに正面に道号、戒名、位号、没年が、夫々縦表記されている。二代に至り初めて没年が刻字されるが、二代夫妻は正面の左隅（向かって右隅）に道号を、中央に戒名を、右隅（向かって左隅）に没年を縦表記するが、三代夫妻は正面中央に道号、戒名、位号を、左隅（向かって右隅）に没年と干支[11]を、右隅（向かって左隅）に没月日を分記している。四代夫妻と六代夫妻は、ともに三代夫妻の表記を一部踏襲し、正面中央に一行で道号、戒名、位号を刻字するが、没年は左側面（向かって右側面）に没年と干支を、右側面（向かって左側面）に没月日を分記している。

龍雲寺の四基は、初代夫妻が正面に道号、戒名、位号、建立年月を、茂富夫妻は正面に道号、戒名、位号と没年が縦表記されている。四基とも慶闇寺の十二基と同様に、院号の刻字は無く、初代夫妻には逆修塔[12]であると思われることから没年は刻字されていない。圓通寺の二代室には、正面に慶闇寺と龍雲寺では表記されていない院号のほか、全法号と没年が縦表記されている。

慶闇寺に建碑されたⅠ型の十二基の水輪部（球形）を見ると、長信夫妻

の二基は、左右の隅に緩やかな角を持たせた六角形とも言えるが、初代以降は、その角が無くなり樽型の四角形へと変化している。横幅の最大直径と高さは、長信夫妻と初代夫妻の四基が、四二cm×二五cmほどであるが、二代夫妻以降は、四二cm×三〇cmほどとなり、厚みが五cmほど増している。

Ⅱ型を建造した茂堯の墓碑は、慶聞寺の二代以降の墓碑とほぼ同規模であることから、それらを基準として新設されたと言える。地輪の正面には、五邑主の墓碑には見られない全法号が、同裏面には没年が縦表記され、同左右の側面には墓碑新設の経緯などが列記されている。

各墓碑の全高と方位は、慶聞寺の長信墓が一三五cmで西、同室墓は一三九cmで西、初代安順墓は一三二cmで西、同室墓は一三〇cmで西、二代茂辰墓は一八三cmで西、同室墓は一八三cmで西、三代茂矩墓は二一〇cmで西、同室墓は二一〇cmで西、四代茂文墓は二〇一cmで西、同室墓は二〇五cmで西、六代茂明墓は一九三cmで西、同室墓は一九七cmで西、七代茂堯墓は一九六cmで南、龍雲寺の初代安順墓は二〇〇cmで南、同室墓は一九三cmで南、茂富墓は一九六cmで南、同室墓は一九六cmで南、圓通寺の二代茂辰室墓は一八二cmで東である。

五輪塔墓の総括

多久家では、初代安順の父長信以降、六代茂明までの歴代邑主夫妻は、佐賀型の五輪塔墓を建造し、宗旨が曹洞宗の単独であることから、五輪塔墓の完全統一形式をとる佐賀本藩の墓制を踏襲したと言える。多久家では、邑主と同室のみ佐賀型の五輪塔墓を建碑したが、御親類家の武雄鍋島家、諫早諫早家、須古鍋島家でも完全統一形式を踏襲しており龍造寺系の四家では、佐賀本藩に対する強い気遣いが感じられる。この五輪塔墓の完全統一形式は、蓮池藩、鹿島藩（泰智寺）の藩主家のほか御一門家の多くが建碑しており、肥前領内における鍋島各家の主墓形と言える。佐賀型の五輪塔墓が建碑された寺院の宗旨は、圧倒的に曹洞宗であるが、他宗旨の臨済宗寺院でも見られる。特に、肥前領と隣接する久留米藩有馬家の菩提寺である臨済宗梅林寺（福岡県久留米市京町二〇九）では、婦女子の墓碑として建碑されている。

五　長方形墓

長方形墓とは

圓通寺の墓所は、本堂の裏から三〇mほど進んだ右側の石段を登った一帯に散在しており、石段途中の左側には支流家の墓所も建造されている。墓域は、四段に段築[13]されており、最上段の四段目には、十一代茂族、同室、十二代乾一郎、同継室の四基が、その下の三段目には、九代茂鄰、同室、十代茂澄の三基が、その下の二段目は、ほぼ隣接して北墓地と南墓地に分かれており、南墓地には七代茂堯、八代茂孝と婦女子三基の全五基が、北墓地には茂堯長女林のほか婦女子全八基が、最下段の一段目には、長信、二代室、多久家合祀墓のほか婦女子など全十基、総計三〇基の墓碑が建造されている。

慶聞寺では、各邑主夫妻の墓域には、覆屋を設けていたことが残されている枘穴から推測することができるが、圓通寺では覆屋は踏襲されず、代替として四囲に石柵が建造されている。各石柵の横幅と奥行きは、七代茂堯が三四一×三一九（各cm）、八代茂孝は三三六×三二〇、九代茂鄰夫妻は五三八×三一八、十代茂澄は三三八×三一八、十一代茂族夫妻は五三九×

三一六、十二代乾一郎夫妻は五四六×三一六である。また、邑主と正室以外にも圓通寺では、九代長女直が二四六×二五〇、慶闇寺では六代二女柏が二四四×二四三、七代長男兼寛と九代長男亀吉郎の並建する両墓が四四九×二五三、九代男兼照が二四九×二四九で、五霊とも邑主と同室に準ずる成人男子、成人女子として建造されたものと考えられる。単独墓の七代、八代、十代の三邑主の各三基、夫妻並建の十一代と十二代の各二基、単独子女墓の各三基と並建された子女墓一基の四基は、夫々同規模に建造されている。ただ、兼照の墓所だけは、石柵が欠失し僅かに柵跡だけが残されている。

長方形墓を建碑したのは、圓通寺の12七代茂堯、11八代茂孝、7九代茂鄰、6同室、5十代茂澄、4十一代茂族、3同室、2十二代乾一郎、1同継室の九邑主（当主）と正室のほか、8金体（十一代男）、9柏樹軒、10心操（九代女直）、14洞源院（七代女利恵）、15春盛院（六代女稲）、16桂林（十代男）、17蓮臺（十代女）、18玉相（十一代男栄吉郎）、19秋光（十代女）、20松山（十一代男千松）、21梅含（十代女）、22龍光院（四代女以久）、25電影、26梅唇、27江春軒、28春林、29無相（十一代男）の全二十六基、慶闇寺の45俊應（十一代男騏三）、46梅園（九代男豹吉）、47大智軒（九代男兼照）、49微笑軒（七代男兼寛）、50蓮泉軒（九代男亀吉郎）、51春光（九代男勇雄）、52桂萼（七代女伊都）、53心操（九代女直）の全八基、地福寺の32七代女林の一基の総計三十五基であるが、心操（直）の墓碑が圓通寺と慶闇寺の両寺に建碑されているために、全三十四霊となる。

長方形墓とは、台石上に塔身を乗せたものであるが、塔身部分の横幅と奥行きがほぼ同規模の角石墓に対し、横幅が広い長方形であることである。全三十五基を見ると、A型とB型の二種に分類することができる。二種の相違は、A型の塔身部の頭部は平坦であるが、左右の隅に丸味を持たせた凹みがあり、正面だけに二重彫りの額縁が彫り抜かれているが、B型の塔身部の頭部は四角錐で、額縁も彫られていない。

B型と神道

B型を建碑したのは、十一代茂族、同室、十二代乾一郎、同継室の四基で、残りの三十一基が全てA型であることから種別は、明治維新後の年代と、婦女子ではなく当主と正室であることが要因と考えられる。四基は、各墓とも三段の台石上、塔身からなり、碑銘はすべて塔身に刻字されている。茂族の正面には、位階[14]と俗名が、裏面には没年が、左側面（向かって右側面）には法号が、同室の正面には、続柄と俗名が、裏面には俗名が、左側面（向かって右側面）には法号が、乾一郎は、正面に位階、爵位、俗名が、裏面には没年が、同継室は、正面に続柄と俗名が、裏面には没年が刻字されている。そのほか茂族の墓碑には、篆書体[15]で「水江龍造寺十四世孫」と、乾一郎の墓碑には、楷書体で「水江龍造寺十五世孫」と、ともに正面上部に刻字されているが、水ヶ江龍造寺家の初代は家兼で、家信は四代、多久家初代安順が五代になるため茂族は十五代、乾一郎は十六代となり歴代中、誰か一人が抜けたことになる。

多久家は、明治後に仏教から神道へ改宗するが、正確な改宗時期は不明である。B型を最初に建碑したのは、明治十七年に死去した茂族で、翌年死去した同室の墓碑には、ともに法号が刻字されているが、その十六年後の明治三十四年に死去した乾一郎、大正十三年に死去した同継室の墓碑には、ともに法号は刻字されていない。ただ、圓通寺の吉木昌久師よりご提供いただいた多久家の系譜に、先住が追記された資料を見ると、乾一郎、

同先室、同継室に法号が記載されている。多久家が明治後に、神道へ改宗したことは事実であるが、筆者は、以前、佐賀本藩の菩提寺である高傳寺の高閑者廣憲師より「当寺では、鍋島家が神道に改宗後も、当主夫妻には戒名をつけていました」と言う旨を教わった。そのため圓通寺でも同様に、多久家が神道に改宗した後も当主夫妻には、法号を付けていたのではないかと思われる。

茂族と同室は、明治維新後も仏教に帰依していたが、墓形は江戸期のA型からB型に改新されている。このことから、江戸期には邑主、正室、婦女子とも全てA型に統一されていたが、明治後の当主と正室だけはB型を新設し、A型を継続した婦女子と形式を種別したものと考えられる。ただ、明治後に夭折し多久に建碑されたのが、春林の墓碑一基だけで、青山霊園に建造されていた旧石も廃棄され現存していない。その後、神道に改宗した乾一郎夫妻も、圓通寺においては茂族夫妻のB型を踏襲したことになる。乾一郎と同継室の墓碑は、ともに圓通寺と青山霊園に建碑されたが、同先室は青山霊園だけで圓通寺には建碑されていない。

墓碑の全高と方位は、茂族が二七九cmで南東、同室は二七九cmで南東、乾一郎は二八四cmで南東、同継室は二八九cmで南東である。四基は、ほぼ同規模であるが、乾一郎の継室の塔身部が、やや高く建造されている。

A型の考察

圓通寺、地福寺、慶闇寺の三箇寺に建碑されたA型の三十一基は、各墓とも二段の台石上、塔身からなり、碑銘は塔身正面の額縁内に法号が、同裏面に没年が刻字されているだけである。全三十一基（三十霊）中、二十九霊が江戸期に死去しており、唯一、明治十三年に夭折した春林の墓碑の

み明治後の建碑である。春林の墓碑には、法号が刻字されていることから、神道への改宗前であることがわかる。

全三十一基の塔身部の横幅、奥行き、高さを見ると、その規模により六種に分類することができる。最も大きなⅠ型は、五〇×四四×一六二（各cm）ほどで、圓通寺の七代、八代、九代、同室、十代の五基で、次に大きなⅡ型は、四二×三五×一三七で、慶闇寺の七代男兼寛の一基である。Ⅰ型は、邑主と正室で、Ⅱ型は、七代の嫡男であることから邑主より小規模で、夭折子女より大きく建碑されている。Ⅲ型は、更に小規模となり三六×三〇×一一九ほどで、圓通寺の金体、柏樹軒、心操、洞源院、春盛院、桂林、蓮台、玉相、秋光の九基と、慶闇寺の俊應、大智軒、蓮泉軒の三基の計十二基、Ⅳ型は、三三×二七×九六ほどで、圓通寺の松山、梅含、龍光院、電影、梅唇、江春軒、無相の七基、慶闇寺の春光、桂萼、心操の三基、地福寺の林の一基の計十一基、Ⅴ型は、三〇×二四×八四で、慶闇寺の梅園の一基、一番小規模なⅥ型は、唯一、明治後に建碑された春林の一基で二七×二二×六五である。茂堯以降の邑主、正室、婦女子の墓碑が同形墓を踏襲したことにより、規模の格差を詳細に分類することができる。ただ、地福寺の林の墓碑が、成人女性の規格ではなく夭折子女相当で建碑されているのは、興味深いことである。

各墓碑の全高と方位は、圓通寺の七代茂堯は二八一cmで南東、八代茂孝は二七八cmで南東、九代茂鄰は二七五cmで南東、同室は二七六cmで南東、十代茂澄は二七六cmで南東、金体は一九五cmで南東、柏樹軒は二〇七cmで南東、心操は一九九cmで南東、洞源院は一九二cmで東、春盛院は二〇四cmで東、桂林は一九九cmで東、蓮台は二〇一cmで東、玉相は一九〇cmで東、秋光は二〇四cmで東、松山は一六二cmで南、梅含は一六四cmで東、龍光院

は一六八cmで東、電影は一七〇cmで東、梅唇は一五九cmで東、江春軒は一五二cmで東、春林は一一九cmで東、無相は一六八cmで南、地福寺の養心院は一七〇cmで北西、慶間寺の俊應は一九一cmで東、梅園は一五二cmで東、大智軒は二〇二cmで東、微笑軒は二二六cmで南、蓮泉軒は一九四cmで南、春光は一七〇cmで南、桂萼は一五八cmで南、心操は一五八cmで南である。

長方形墓の総括

この長方形墓は、七代茂堯が邑主と正室の葬地を、慶間寺から圓通寺へ変更したことにともない新設された形式である。それまでとは異なり、墓形を邑主・正室と婦女子により種別することなく、全墓碑の墓形として明治維新以降も踏襲され、多久以外の慶間寺でも建碑されている。この長方形墓は、肥前領内に建造されている四藩主家ほか御一門家などでも皆無で、多久家独自の墓形式と言える。また、肥前領内には、類似墓さえも建碑されていないことから同墓形の新設に際し、基礎となった墓碑も不明である。規模は、邑主と正室を頂点とし、居士、大姉、童子、童女などの身分により、特に童子女は、生存期間（享年）などにより細かく規模が選別されたものと思われる。

六　笠塔婆墓

笠塔婆墓の変遷

笠塔婆墓を建碑したのは、圓通寺の24長信、慶間寺の57大円（二代女）、55渭叟（三代男）、56蘭江（三代女）、58幻清（三代女）、48柏意（六代女）、龍雲寺の63健伯（茂富男長昌）、宝蔵寺の31覚心院の全八基であるが、各寺により大きく形式の異なる墓碑を建碑している。

慶間寺の五基は、長方形墓が新設されるまでの夭折子女の墓形として建碑されていたが、大円、幻清の二基と、渭叟、蘭江、柏意の三基の二種に分類することができる。二種とも笠塔婆墓ではあるが、形式上は大きく異なり、五霊の没年が古い順に列記すると、大円が承応二年（一六五三）、幻清は寛文六年（一六六六）、蘭江は元禄十四年（一七〇一）、渭叟は宝永五年（一七〇八）、柏意は享保七年（一七二二）であることから、蘭江以降に墓形が改新されたことがわかる。

大円と幻清の二基は、ともに一段の台石上、塔身、笠、宝珠[16]からなり、塔身正面の上部には仏像が彫刻されている。両墓碑の特徴は大きな笠で、通常、塔身部が角柱状であれば、一般的な笠を使用するが、両墓のような立方体に近い形状の時には、大きな笠が使用されることが多く見られる。また、塔身正面の仏像の下には、法号が刻字されているが、没年の表記が塔身ではなく、台石の正面に記されている。方位は、ともに東である。

渭叟、蘭江、柏意の三基は、ほぼ同形式ではあるが、Ⅰ型の渭叟とⅡ型の蘭江、柏意の二種に分類することができる。Ⅰ型は、三段の台石上、円形の敷茄子[17]、円形の蓮華座、四角形の塔身と笠、露盤[18]、下請花[19]、三個の九輪[20]、上請花、宝珠から、Ⅱ型は、二段の台石上、円形の蓮華座、四角形の塔身と笠、露盤、下請花、三個の九輪、上請花、宝珠からなり、台石数と敷茄子の有無が大きな相違である。

台石は、Ⅰ型・Ⅱ型とも下台石には何も彫刻されていないが、上台石の頭部四面には反花が彫刻されている。Ⅰ型の中台石、Ⅱ型の上台石の正面のみ、ともに二区分けの額縁内に格狭間[21]が彫刻されている。塔身の正面には、Ⅰ型・Ⅱ型とも左右両開きの石扉を設け、左側（向かって右側）の石

扉の内側には没年が、右側（向かって左側）の石扉の内側には没月日が刻字され、没年が分記されている。塔身の正面に、左右両開きの石扉を設ける形式は、佐賀本藩ほか四藩主家では見られないが、御一門の白石鍋島家の墓碑に多く建造されている。石扉内の塔身正面には、ともに額縁内に法号が刻字されているが、額縁はⅠ型が一重彫りであるが、Ⅱ型は二重彫りである。笠上に、露盤、請花、宝珠を設けるのが一般的な笠塔婆墓の形式であるが、宝篋印塔墓に見られる相輪[22]を持つことが大きな特徴で、鹿島の普明寺（臨済宗黄檗派）に建碑された鹿島藩主家の墓形式とも酷似している。方位は、渭叟と蘭江が東、柏意は南である。

蓮の墓碑は、三段の台石上、敷茄子、蓮華座、塔身、笠、露盤、宝珠からなり、塔身正面の一重彫りの額縁内に、法号と没年が刻字されている。蓮は、佐賀本藩の側室であるため多久家の墓制は踏襲されておらず、一般的な形式ではあるが、佐賀本藩でも多久家でも建碑されていない。墓碑の全高は二一六cm、方位は南である。

圓通寺に建碑された林の墓碑は、父茂堯の墓碑とは十mほど離れてはいるが、同じ三段目墓域内に並建されている。林が死去したのは明和三年（一七六六）であるが、六年後の安永元年（一七七二）七月十七日に同寺へ改葬されている。林の墓碑が、地福寺にも建碑されていることから圓通寺の墓碑は、改葬に際し新設されたものと思われる。墓碑は、正面以外の三面をブロック塀で囲まれており、敷石上、二段の台石に、下敷茄子、下蓮華座、基礎石、上敷茄子、上蓮華座、仏像の塔身からなるもので、上下の敷茄子と上蓮華座は円形で他は四角形である。塔身部の仏像には碑銘は無く、基礎石の正面に法号が、同裏面に没年が刻字されている。墓碑の全高は二四〇cm、方位は南東である。

七　逆修塔

逆修塔を建碑したのは、圓通寺の長信と、慶闇寺の長信、同室、初代安順、同室、龍雲寺の安順?、同室?の全七基?である。圓通寺の長信の墓碑は『多久市史』によると、慶長九年（一六〇四）に建碑され、元禄十一年（一六九八）に大門前から現在地に移転されたと言う。墓碑は、一段の台石上、塔身、笠、宝珠からなり台石は、底部幅よりも頭部幅の広い逆台形であるが、塔身部は逆に、横幅の底部が五〇・一cm、頭部が三八・五cm、奥行きの底部が二一・〇cm、頭部が一八・五cmの底部幅が広い四角錐である。塔身の正面には、法号と建造年月だけが刻字されており、笠上の宝珠は通常の形式ではなく、神社の鳥居に見られる笠木[23]を模した笠木型である。墓碑の全高は一四五cm、方位は東南である。

慶闇寺の四基では、長信室の墓碑のみ「逆修」の刻字が見られるが、各墓とも建造年月などが刻字された笠塔婆型の墓誌が置かれている。墓誌が建てられた位置は、長信が同室墓の前部、同室は長信墓の後部、安順は同人墓の右側（向かって左側）、同室は同人墓の左側（向かって右側）である。墓誌の碑銘は「逆修天理元心山主壽位・干時慶長十乙巳天二月彼岸誌之」、「逆修芳岩妙春大姉壽位・干時慶長十乙巳歳八月彼岸吉□」、「逆修天叟浄祐菴主・寔寛永十癸酉歳彼岸日」、「逆修月照妙園大姉・寔寛永十癸酉歳八月彼岸日」で、銘文から長信の墓碑は死去の八年前に、同室の墓碑はその半年後に、安順の墓碑も死去の八年前に、同室の墓碑は安順の墓碑とともに建碑されたことがわかる。

慶闇寺で最初に建碑されたのは長信の逆修塔で、半年後に同室の逆修塔

が並建され、その二十八年後に安順夫妻の逆修塔が隣接して並建されたことになる。逆修塔であるため四基とも、墓碑には没年は刻字されていない。また、龍雲寺の安順と同室の二基には、「逆修」の刻字や墓誌は無いが、没年が刻字されていないことから推測すると、逆修塔である可能性が高いと思われる。

長信の逆修塔は、圓通寺では慶長九年（一六〇四）に、慶闇寺では翌十年（一六〇五）に建碑されているが、先に建碑された圓通寺の墓形が笠塔婆墓であることから慶闇寺の長信墓が、多久家における最初の五輪塔墓であったと言える。その後、五輪塔墓は、慶闇寺において歴代邑主夫妻と圓通寺の供養塔として踏襲されていくことになる。

八　墓碑の築造と配置

段築墓所

圓通寺の多久家墓所への入口である石段を登ると、最下段の一段目墓域に出るが、やや左の石段を登った二段目墓域の正面に、七代茂堯の墓所が建造されている。以降、邑主ほか婦女子の墓碑は、茂堯の墓所を中心として四方に建碑されていくことになる。次の八代茂孝の墓所は、茂堯の墓所の右側（向かって左側）に隣接して建造されたが、次の九代茂鄰と同室の墓所は、茂堯と茂孝の二段目墓域の後方上に、新たに増設された三段目墓域に建造されている。次の十代茂澄の墓所は、茂鄰の墓所の右側（向かって左側）に隣接して建造されたが、次の十一代茂族と同室の墓所は、茂鄰と茂澄の三段目墓域の後方上に、新たに増設された最上段の四段目墓域に、次の十二代乾一郎と同室の墓所は、茂族の墓所の右側（向かって左側）に隣接して建造されている。

七代から十二代までの六邑主（当主）の墓所の配置を見ると、最初に二段目墓域に二邑主の墓所を並建するが、同段上には三代続けては建造されていない。その後は、左右ではなく後方の上部に墓所を新設し、更に、二邑主の墓所が並建されると、更に、その後方上部に新たに段築を繰り返している。二段目、三段目、四段目の各二邑主夫妻の墓所は、先に左側（向かって右側）から建造され、次に右側（向かって左側）に隣接して並建されている。結果的には、十二代乾一郎夫妻の墓所で段築は終了となるが、江戸時代が、または華族制度が更に存続されていれば、五段目、六段目と、更に段築されたものと思われる。二段目と三段目間の石段は、向かって右側だけに、三段目と最上段の四段目間の石段は、逆に向かって左側だけに設けられており、左右交互に建造されたことがわかる。婦女子の墓所は、二段目墓域の茂堯と茂孝の両墓所の左右と、最下段の一段目墓域内に散在しているが、男女による種別や没年順でもないことから邑主夫妻とは異なり、配列や方位の規則性などは見られない。

夫妻並建と方位

墓碑の方位を見ると、慶闇寺では各邑主と正室は、昭和期に新設された七代茂堯を除き全て西に統一されているが、その他の婦女子は、邑主と正室の方位を避け東か南に向き建碑されている。圓通寺での邑主と正室は、すべて南東であるが、その他の婦女子は、南の松山と無相の二基を除き、すべてやや北側に傾き東である。龍雲寺の四基は、すべて南であるが、明治後に墓所が改修されたと考えられることから、建造当初の正確な配置や方位などは不明である。

長信から十二代乾一郎までの十三当主で、婚約破棄や離縁した七代、八代、十代以外の九邑主（当主）の墓所は、すべて同室の墓碑と並建されている。昨年の『研究紀要』第十五号で筆者は、蓮池藩主鍋島家の墓制を報告したが、同家の菩提寺である蓮池の宗眼寺でも各藩主と同室の墓碑は、すべて並建されている。宗眼寺では各正室の墓碑は、どの方位に建造されていても、すべて藩主の墓碑の右側（向かって左側）に配置されている。一方、多久家を見ると、長信から六代茂明までの慶闇寺では、蓮池藩とは異なり全ての正室の墓碑が邑主の墓碑の左側（向かって右側）に配置されているが、七代茂堯から十二代乾一郎までの圓通寺では、逆に全ての正室の墓碑が右側（向かって左側）に配置されている。慶闇寺から圓通寺への邑主夫妻の葬地変更では、墓形以外にも配置も変更されたのである。

慶闇寺から圓通寺への邑主夫妻の葬地変更にともない配置替えが行なわれたが、夫妻並建の墓制は踏襲されているので、先に死去した邑主、または正室は、一方の空き墓所地を設け建造されたものと思われる。長信夫妻と初代夫妻の逆修塔は、ほぼ同時期に建碑されているが、慶闇寺の二代と三代は正室が、四代と六代は邑主が、圓通寺の九代、十代、十一代は、邑主が先に死去している。

九　東京から多久へ

明治後の新たな葬地に定められた青山霊園には、明治十二年に夭折した乾一郎の長男静雄以降、当主ほか婦女子の墓碑が建碑されたが、昭和三十三年に改葬され合祀墓が新設されていた。筆者は、何度となく墓参をしてきたが、圓通寺の吉木昌久師によると「多久家より改葬の申し出がありましたので了承し、令和元年六月二十五日に改葬工事を終了いたしました」と、ご教示いただいた。墓碑は、石段を上った墓所の入口に移転されており、敷石上、二段の台石に頭部が瘤付の塔身からなる角石墓で、手前の水鉢には、同家の十二日足紋が彫刻されている。塔身の正面には、「多久家之墓」と、同裏面には、改葬年月と移設年月が、同左側面には、十二代乾一郎、同先室、同継室、十三代龍三郎のほか全九霊の、同右側面には、十四代皓一郎の各俗名と没年が列記されている。移設年月は、圓通寺への改葬時に、追記されたものである。墓碑の全高は一六九cm、方位は青山霊園では南東、圓通寺でも南東である。

十　多久家墓制の総括

多久家が大名家ではないため、他藩主家との比較が妥当かと言えば疑問であるが、肥前領内の各家と比較しても、同家の墓制が異質であることがわかる。歴代邑主の葬地は、初代安順以降、佐賀の慶闇寺に五輪塔墓を建碑したが、七代茂堯以降は、葬地を多久の圓通寺に、墓形も長方形墓に変更されている。肥前領内では、歴代当主の墓碑は、一寺院に建碑され墓形も踏襲されているが、多久家では江戸中期に葬地と墓形が変更されている。また、御親類家、御一門家の各家は、領地内に埋葬されているが、多久家では江戸中期まででではあるが、藩公の城下内に埋葬されている。婦女子は、初代安順以降、葬地を慶闇寺に、墓形も笠塔婆墓に限定されたが、葬地替えが行なわれた七代茂堯以降は、葬地を慶闇寺に限定することなく両寺に分葬されたが、墓形は新設された長方形墓に限定統一されている。

歴代邑主夫妻の墓碑は、並建されているが、その位置関係を見ると、正

室の墓碑は、慶闇寺では邑主の墓碑の左側（向かって右側）であるが、圓通寺では、逆の右側（向かって左側）に変更されている。最終的な総括としては、七代茂堯以降、邑主と正室の葬地を、佐賀城下から領地多久へ、慶闇寺から圓通寺へ、墓形を五輪塔墓から長方形墓に、夫妻並建の配列を逆にするなど、それまでの墓制を全否定するように覆している。

おわりに

群雄割拠した戦国時代、全国各所に戦国大名が存在したが、徳川政権下において、大名家として存続できた家は僅かであった。しかし、龍造寺家は、佐賀藩鍋島家の家臣となり現在に血脈を伝えている。今回、多久家の報告をさせていただいたが、今後も調査を継続し、肥前領内における墓碑、墓制の全容を解明したいと考えている。

最後に、本論考を纏めるにあたり、調査のご理解と写真掲載の許可などいただいた圓通寺の吉木昌久師、慶闇寺の関久龍峰師、地福寺の梶原泰信師に厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

「御霊簿」公益財団法人鍋島報效会・佐賀県立図書館寄託鍋島家文庫
「同格系図（多久家系図）」同
「鍋島系図始龍造寺」　同
「鍋島御系図」　同
「公儀被差上候三家系図」同
「御家老系図」　同
『多久市史』第二巻近世編　多久市史編纂委員会　平成十四年
『探究の郷』第四号「後多久の殿様」瓦田琢磨　多久市郷土研究会　昭和六二年
『佐賀県近世史料』佐賀県立図書館近世資料編纂室
『平成新修旧華族家系大成』霞会館華族家系大成編輯委員会　吉川弘文館　平成八年
「佐賀藩主鍋島家の墓碑考察」公益財団法人鍋島報效会
『公益財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』第七号　秋元茂陽　平成二八年
「蓮池藩主鍋島家の墓碑」佐賀大学地域学歴史文化研究センター
『研究紀要』第一五号　秋元茂陽　令和二年
「小城藩主鍋島家の墓碑考察」黄檗山萬福寺文華殿・黄檗文化研究所
『黄檗文華』第一三三号　秋元茂陽　平成二六年
「肥前鹿島藩主鍋島家の墓碑考察」黄檗山萬福寺文華殿・黄檗文化研究所
『黄檗文華』第一三九号　第一四〇号　秋元茂陽　令和二年・同三年
『佐賀百寺巡拝』溝口教章　佐賀県寺院名鑑刊行会　平成二四年
『文化財の見方』人見春雄・野呂肖生・毛利和夫　山川出版　昭和五九年
『江戸大名墓総覧』秋元茂陽　平成十年　金融界社
『徳川将軍家墓碑総覧』秋元茂陽　平成二〇年　星雲社

【補註】

(1) 位号（いごう）　○○院殿□□△△☆☆の☆☆の箇所で、居士、大姉、童子、童女など

(2) 基台（きだい）　建物の土台で外面を石材で包む基壇を意味するが、筆者は基台と表現

(3) 枘穴（ほぞあな）　90度の直角に接合する枘継ぎで、突起を差し込み固定するための穴

(4) 覆屋（おおいや）　墓碑を雨風などから保護するために、周囲に設けられた木造の建物

(5) 反花（かえりばな）　外側を包んでいた花弁が開いて反る様子を表わしたもの

(6) 蓮華座（れんげざ）　円形、四角形、六角形などの周囲に、蓮弁を彫刻した台座

(7) 道号（どうごう）　補註一の□□の二文字

(8) 戒名（かいみょう）　補註一の△△の二文字　道号が無く戒名だけの法号もある

(9) 官名（かんめい）　江戸大名家で通称として使用され、陸奥守などの国名と、修理大夫などの官途名がある

(10) 院号（いんごう）　補註一の○○の二文字、三文字院号もある。ほかに多久家でも見られる軒号、庵号など

(11) 干支（かんし）　十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）を組み合わせ六〇を周期とする数詞

(12) 逆修塔（ぎゃくしゅうとう）　逆（あらかじ）め冥福を修めるという意味、生前に自身の墓碑を建立する

(13) 段築（だんちく）　各段の斜面に隙間なく石を詰めた石垣状の段差

(14) 位階（いかい）　大勲位、正二位、従三位など

(15) 篆書体（てんしょたい）　漢字、モンゴル文字、満州文字の書体の一種、水平と垂直の線を基本に、円弧をなす水平線、垂直線と交差するように曲げられ丸められる。パスポートの「日本国旅券」の文字に使用されている

(16) 宝珠（ほうじゅ）　笠上の相輪部の最上部にあり、球形の頭頂部が尖っている

(17) 敷茄子（しきなす）　蓮華座の下にある鼓型の台、花と茎の付け根を表わしたもの

(18) 露盤（ろばん）　笠上の相輪の最下部にあり、屋根の頂点に雨仕舞と装飾の目的で設けられたもの

(19) 請花（うけばな）　相輪部の宝珠や九輪の下にある花形の装飾、多くは八葉の蓮華で上を向いている

(20) 九輪（くりん）　相輪部の一部で、九輪重ねの輪装飾、通常は九個であるが、七個、五個、三個に簡略されることもあるが必ず奇数個

(21) 格挟間（こうざま）　上部が花窓などの複雑な曲線で、下部は椀形をした図案

(22) 相輪（そうりん）　笠上に設けられた宝珠、九輪、請花などを含む総称

(23) 笠木（かさぎ）　明神鳥居の最上部にある弓型の部位で、上部に向け反っており、両端は斜角である

【多久　圓通寺】

1　正五位男爵多久乾一郎室伊丹千枝墓（長方形）
裏）大正十三年十二月十九日卒
（十二代乾一郎継室千枝・伊丹〈華族〉重賢五女）

2　水江龍造寺十五世孫正五位男爵多久乾一郎墓（長方形）
裏）明治三十四年十一月十八日卒
（十二代乾一郎）

3　従五位多久茂族室鍋(鍋)島雍子墓（長方形）
左）法號(号)清箏院殿古調和雍大姉
裏）明治十八年三月廿八日卒
（十一代茂族正室雍・鍋島〈須古〉茂真女）
《十二代乾一郎生母》

4　水(篆)江龍造寺十四世孫(体)従五位多久茂族墓（長方形）
左）法號(号)晩翠院殿龍松茂族大居士
裏）明治十七年十二月廿二日卒
（十一代茂族）

5　遲春院殿梅(梅)溪(渓)一睡居士（長方形）
裏）天保十四年癸卯正月六日卒
（十代茂澄）

6　聖雲院殿賢室妙貞大姉（長方形）
裏）天保十二年辛丑八月二十一日卒
（九代茂鄰正室勝・鍋島〈神代〉茂真女）

7　慈照院殿道桂良覺(覚)老居士（長方形）
裏）文政十年丁亥五月十四日卒
（九代茂鄰）

8　金體(体)幻性禪(禅)童子（長方形）
裏）文久元年(年)辛酉三月廿八日卒
（十一代茂族男？）

9　柏樹軒一峰良森居士（長方形）
裏）天保五年甲午夏六月十九日卒

10　心操皎月禪童女（長方形）
裏）天明八戊申歳十一月十八日
（九代茂鄰長女直）

11　慈雲軒蘭山淨蕙居士（長方形）
裏）文化十二年乙亥二月十八日卒
（八代茂孝）

12　祥雲軒鳳山見瑞老居士（長方形）

裏）明和六己丑年(年)八月六日
（七代茂堯）

13　養(養)心院殿大眞(真)觀(観)樹大姉（仏像形）
裏）明和三年丙戌七月十九日卒
（七代茂堯長女林）

14　洞源院月湛(湛)妙照大姉（長方形）
裏）文化元年甲子九月五日
（七代茂堯三女利恵）

15　春盛院心月智性大姉(姉)（長方形）
裏）寛政二庚戌三月十八日
（六代茂明長女稲）

16　桂林幻香禪童子（長方形）
裏）天保元年庚寅秋七月十六日卒
（十代茂澄男？）

17　蓮臺(台)妙花禪(禅)童女（長方形）
裏）天保四年癸巳夏六月十二日卒
（十代茂澄女？）

18　玉相浄觀(観)禪童子（長方形）
裏）文久元年辛酉七月六日卒
（十一代茂族男栄吉郎）

19　秋光素月禪童女（長方形）
裏）天保七丙申年九月廿四日
（十代茂澄女？）

20　松山翠操禪童子（長方形）
裏）嘉永六年癸丑十二月廿日卒
（十一代茂族男千松）

21　梅含清操禪童女（長方形）
裏）天保八丁酉二月十四日
（十代茂澄女久）

22　龍光院玄珠浄(淨)海(海)大姉（長方形）
裏）寶(宝)暦(暦)六丙子正月念(二十)二日
（四代茂文女以久）

23　天性院久圓(円)妙長大姉（五輪塔）
正）寛文七丁未歳六月二日
（二代茂辰正室鶴・鍋島〈佐賀〉勝茂二女）
《三代茂矩生母》

24　逆倏(修)天理元心山主壽(寿)位（変形笠塔婆）
正）干時慶長九甲辰(辰)天霜月(十二)二日誌之
（没年記無・慶長十八年十月十八日）
（初代安順父長信）

25　電影禪童子（長方形）
裏）天明七未歳三月九日

26　梅唇(昏)玉露禪童子（長方形）
裏）文化十四年丁丑十一月四日

27　江春軒梅萼壽(寿)芳居士（長方形）
裏）文化四年丁卯正月十四日

28　春林淨(浄)香禪童子（長方形）
裏）明治十三年四月十二日卒

29　無相了圓(円)禪童子（長方形）
裏）慶應三年丁卯五月十九日
（十一代茂族男？）

30　多久家之墓（角石）
裏）昭和三十三年十一月改修　令和元年七月　都立青山霊園より移設
左）正五位勳(勲)六等男爵多久乾一郎　明治三十四年十一月十八日卒
（十二代乾一郎）

室　少枝子　明治十九年四月三十日卒
（十二代乾一郎正室少枝子・伊丹〈華族〉重賢二女）

室　千枝子　大正十三年十二月十九日卒
（十二代乾一郎継室千枝子・伊丹〈華族〉重賢五女）

長男静雄　明治十二年八月四日卒
（十二代乾一郎長男静雄）

茂　明治二十三年四月十七日卒
（十二代乾一郎二男茂）

嬰女　同　二月十四日卒
（十二代乾一郎四女）

朝子　明治二十九年八月二十六日卒
（十二代乾一郎五女朝子）

喜美子　昭和二十六年十二月六日卒
（十三代龍三郎長女喜美子）

龍三郎　昭和五十八年九月十四日卒
（十三代龍三郎）

右）多久明子　平成三年三月十八日卒
（十三代龍三郎室明子・小笠原〈小倉〉長幹長女）

多久皓一郎　平成十六年四月七日卒
（十四代皓一郎）

多久茂美
（十四代皓一郎室茂美）

【多久　宝蔵寺】

31　覺心院妙光日充淑㐂位（霊）（笠塔婆）
正）寛文九己酉暦十二月二日
（鍋島〈佐賀・二代〉光茂側室蓮）
《四代茂文生母》

【多久　地福寺】

32　養心院大眞觀（真観）樹大姉（長方形）
裏）明和三年丙戌七月十九日
（七代茂堯長女林）

【佐賀　慶閤寺】

33　天理元心（五輪塔）
（没年記無・慶長十八年十月二十六日）
（初代安順父長信）

34　逆修　芳巌妙春（五輪塔）
（没年記無・元和五年十月二十三日）
（初代安順父長信正室・小田政光女）
《初代安順生母》

35　天叟淨祐居士（五輪塔）
裏）多久長門守藤（藤）原安順朝臣
（没年記無・寛永十八年十月二十六日）
（初代安順・龍造寺長信長男）

36　月照妙圓（円）大姉（姉）（五輪塔）
裏）安順妻室
（没年記無・万治二年十月十四日）
（初代安順正室千鶴・鍋島〈佐賀〉直茂三女）

37　愚溪（渓）道如（五輪塔）
正）峕（時）寛文九己酉天正月六日
（二代茂辰・多久〈多久〉茂富〈初代安順養子〉長男）

38　久圓(円)妙長（五輪塔）
正）皆(時)寛文七丁未天六月二日
（二代茂辰正室鶴・鍋島〈佐賀〉勝茂二女）
《三代茂矩生母》

39　玄山良珠居士（五輪塔）
正）元禄二歳次己巳十二月十日
（三代茂矩）

40　亨巖(厳)妙貞大姉（五輪塔）
正）承應(応)三歳次甲午四月十七日
（三代茂矩正室菊・神代〈川久保〉常利女）

41　雄山元英居士（五輪塔）
左）正德(徳)元辛卯年
右）八月二十九日
（四代茂文・鍋島〈佐賀〉光茂四男）

42　實(実)相良圓(円)大姉（五輪塔）
左）寛保三癸亥年
右）四月初四日
（四代茂文正室彦市・鍋島〈白石〉直堯長女）

43　輝山浄光居士（五輪塔）
左）元文四己未年
右）八月二十日
（六代茂明・鍋島〈須古〉茂清長男）

44　瑚炎(光)月珊大姉（五輪塔）
左）寛延三庚午年
右）七月十二日
（六代茂明正室曾雄・多久〈多久〉茂文二女）
《七代茂堯生母》

45　俊應(応)自得禪(禅)童子（長方形）
裏）慶應(応)元年乙丑八月廿八殤(殤)
（十一代茂族男騏三）

46　梅圃(園)清香禪(禅)童子（長方形）
裏）文化五年(年)戊辰(辰)二月十九日
（九代茂鄰男豹吉）

47　大智軒圓(円)山良融居士（長方形）
裏）享和元年辛酉十一月十四日
（九代茂鄰男兼照）

48　柏意禪(禅)童女（笠塔婆）

扉左）享保七壬寅年(年)
扉右）七月三日
（六代茂明二女柏）

49
微笑(微笑)軒聯(聯)山流芳居士（長方形）
裏）寶暦(宝暦)四甲戌五月十一日
（七代茂堯長男兼寛）

50
蓮泉軒香山良清(清)居士（長方形）
裏）寛政五丑年(年)六月十七日
（九代茂鄰長男亀吉郎）

51
春光露觀(露観)禪(禅)童子（長方形）
裏）寛政五巳年(年)二月十一日
（九代茂鄰男勇雄）

52
桂蕚智香禪(禅)童女（長方形）
裏）寶(宝)暦九卯八月十九日
（七代茂堯四女伊都）

53
心操皎月禪(禅)童女（長方形）
裏）天明八戊申歳十一月十八日
（九代茂鄰長女直）

54
祥雲軒鳳山見瑞居士（五輪塔）
裏）明和六丑年八月六日
右）爲(為)先祖菩提
泉州堺市柳之町東二丁月藏(蔵)寺境内ニ御埋葬ノ祖先祥雲(雲)軒鳳山見瑞居士之御靈(霊)ヲ九州佐賀本庄村慶闇寺境内ニ御在シマス歴代祖先ノ地ニ分骨奉遷シ茲(茲)ニ祥雲軒鳳山見瑞居士靈(霊)塔ヲ造立以ツテ慰靈(霊)供養トシテ永代囘(回)向料ヲ奉納ス東京施(施)主井川與(与)三
左）氏ハ誠ニ三寶(宝)護念之志篤ク先ニ数々ノ御寄(寄)進一門標一基一皇紀二千六百年紀念聖觀(観)音立像一基一大般若経蔵佛(仏)塔(塔)一基今囘(回)茲(茲)祥雲軒様(様)ノ御御宝塔(塔)ヲ造立シ慰靈供養トシテ永代回向料一萬円ヲ奉納セラル洵ニ御追孝ノ至ト日ヘキナリ
維時昭和二十八年八月吉祥日　當山三十七世施(施)居七十七才
銀峰謹書
（七代茂堯）

55
渭叟(叟)元節(節)居士（笠塔婆）
扉左）宝永五戊子年(年)
扉右）閏正月初八日
（三代茂矩五男文貞）

56
蘭江性秀大姉（笠塔婆）
扉左）元禄十四歳次辛巳暦
扉右）十一月初三日

（三代茂矩三女登恵・鍋島〈横岳〉茂清縁女）

57　圓(円)通童女（笠塔婆）

台正）乳持花屋妙香　峠(時)(承)兼應三甲午歳六月念四日

（二代茂辰五女乙千代）

58　刁(幻)清(清)童女（笠塔婆）

台正）峠(時)寛文六丙午歳十二月念五日

（三代茂矩二女次）

【佐賀　龍雲寺】

59　天叟(叟)淨(淨)祐居士（五輪塔）

正）慶長十二季(年)丁未八月吉日　現世安穏後生善處(処)

（没年記無・寛永十八年十月二十六日）

（初代安順）

60　月照妙圓(円)大姉(姉)（五輪塔）

正）慶長十二季(年)丁未八月吉日　奉□□□□□

（没年記無・万治二年十月十四日）

（初代安順正室千鶴・鍋島〈佐賀〉直茂三女）

61　久山隆(隆)永居士（五輪塔）

正）萬(万)治二己天六月二十六日

（初代安順養子茂富・龍造寺家均長男）

《二代茂辰實父》

62　梅(梅)室妙林大姉（五輪塔）

正）元和七辛酉天十二月六日

（初代安順養子茂富正室・鍋島〈太田〉茂連女）

《二代茂辰生母》

63　健伯道勇(勇)居士（笠塔婆）

正）寛文七丁未歳(歳)九月十有六日

（初代安順養子茂富二男長昌）

【備考】

正・・・正面

裏・・・裏面

右・・・向かって左側面

左・・・向かって右側面

扉右・・扉の向かって左側

扉左・・扉の向かって右側

台正・・台石の正面

誕生地	没　齢	法　　号	葬　　地	備　　考
	74	岩松軒天理元真山主	佐賀　慶閤寺	多久　圓通寺にも建碑
水ヶ江	77・78	天叟浄祐庵主	佐賀　慶閤寺	佐賀　龍雲寺にも建碑
水ヶ江	60	得一軒禺溪道如居士	佐賀　慶閤寺	
佐　賀	59	無尽軒玄山良珠居士	佐賀　慶閤寺	
佐　賀	41	正智軒雄山元英居士	佐賀　慶閤寺	
小　城	45	圓覺院殿錦山淨高大居士	小城　星巌寺	直英改名　小城鍋島家襲封
須　古	45	廓珠軒輝山淨光居士	佐賀　慶閤寺	
佐　賀	52	祥雲軒鳳山見瑞居士	大阪　月蔵寺？	多久　円通寺に埋葬 月蔵寺より　慶閤寺へ改葬
水ヶ江	62	慈雲軒蘭山淨蕙居士	多久　圓通寺	
水ヶ江	67	慈照院殿道桂良覺居士	多久　圓通寺	
佐　賀	31	遅春院殿梅溪一睡居士	多久　圓通寺	
	51	晩翠院殿龍松茂族大居士	多久　圓通寺	
	49	水江院殿乾綱順德居士	東京　青山霊園	多久　圓通寺にも建碑

葬　　地	法　　号	備　　考
佐賀　慶閤寺	德壽院殿月照妙圓大姉	佐賀　龍雲寺にも建碑
佐賀　慶閤寺	天性院殿久圓妙長大姉	多久　圓通寺にも建碑
佐賀　慶閤寺	浄閑院殿亨巌妙貞大姉	
佐賀　慶閤寺	正眼院殿實相良圓大姉	
小城　星巌寺	本良院殿貞好淨貴大姉	
佐賀　慶閤寺	海含院殿瑚光月珊大姉	
小城　星巌寺	瑞林院殿瑶室眞盛大姉	婚約解消
佐賀　本行寺	寶泉院殿妙流日浄大姉	茂孝病弱のため婚約解消
多久　圓通寺	聖雲院殿賢室妙貞大姉	
京都　清泉寺	春暁院殿珠光妙艶大姉	離縁後　久世〈公卿〉通熙に再嫁
多久　圓通寺	清箏院殿古調和雍大姉	
東京　青山霊園		
東京　青山霊園		多久　圓通寺にも建碑

没齢…実死亡年齢

多久家邑主一覧

代数　俗名	実　　父	生　　母	生　年　月　日	没　年　月　日
長　信	龍造寺（水ヶ江）周家３男	龍造寺　胤和女？	天文７年（1538）10月28日	慶長18年（1613）10月26日
初代　安　順	龍造寺（多　久）長信長男	小　田　政光女	永禄６年（1563）某月某日	寛永18年（1641）10年26日
２代　茂　辰	多　久（多　久）茂富長男	鍋　島　茂連女	慶長13年（1608）５月19日	寛文９年（1669）正月６日
３代　茂　矩	多　久（多　久）茂辰長男	鍋　島　勝茂女	寛永７年（1630）10月15日	元禄２年（1689）12月10日
４代　茂　文	鍋　島（佐　賀）光茂３男	相　馬　氏　女	寛文９年（1669）11月26日	正徳元年（1711）８月29日
５代　茂　村	鍋　島（小　城）元武３男	城　島　家永女	元禄12年（1699）３月17日	延享元年（1744）９月12日
６代　茂　明	鍋　島（須　古）茂清　男	鍋　島　茂紀女	元禄６年（1693）10月16日	元文４年（1739）８月20日
７代　茂　堯	多　久（多　久）茂明長男	多　久　茂文女	享保元年（1719）10月27日	明和６年（1769）８月６日
８代　茂　孝	多　久（多　久）茂堯２男	山　中　氏　女	寶暦２年（1752）12月24日	文化12年（1815）２月18日
９代　茂　鄰	多　久（多　久）茂堯３男	田　中　氏　女	寶暦９年（1759）10月28日	文政10年（1827）５月14日
10代　茂　澄	多　久（多　久）茂鄰３男	深　町　氏　女	文化８年（1811）５月20日	天保14年（1843）正月９日
11代　茂　族	多　久（多　久）茂澄長男	川　崎　氏　女	天保４年（1833）９月20日	明治17年（1884）12月22日
12代　乾一郎	多　久（多　久）茂族長男	鍋　島　茂真女	嘉永５年（1852）５月	明治34年（1901）11月18日

多久家正室一覧

夫　　名	父　　名	俗　名	生　年　月　日	没　年　月　日	没　齢
初代　安　順	鍋島（佐賀）直茂	千鶴	元亀３年（1572）某月某日	萬治２年（1659）10月14日	86･87
２代　茂　辰	鍋島（佐賀）勝茂	鶴	慶長13年（1608）10月11日	寛文７年（1667）６月２日	59
３代　茂　矩	神代（神代）常利	菊	寛永15年（1638）某月某日	承應３年（1654）４月17日	15･16
４代　茂　文	鍋島（白石）直氏	彦市	延寶７年（1679）８月20日	寛保３年（1743）４月４日	63
５代　茂　村	多久（多久）茂文	千	元禄11年（1698）７月12日	寶暦２年（1752）６月18日	53
６代　茂　明	多久（多久）茂文	曽雄	元禄12年（1699）９月４日	寛延３年（1750）７月12日	50
７代　茂　堯	鍋島（小城）直英	久米	享保12年（1727）11月４日	安永６年（1777）８月16日	49
８代　茂　孝	鍋島（白石）直右	連喜	寶暦６年（1756）６月19日	寛政10年（1798）４月13日	39
９代　茂　鄰	鍋島（神代）茂眞	勝	寶暦６年（1756）７月３日	天保12年（1841）８月21日	85
10代　茂　澄	鍋島（佐賀）齊直	定	文化８年（1811）２月８日	嘉永５年（1852）３月18日	41
11代　茂　族	鍋島（須古）茂眞	雍	天保６年（1835）２月	明治18年（1885）３月28日	50
12代　乾一郎	伊丹（華族）重賢	少枝	安政４年（1857）10月	明治19年（1886）４月30日	28
	伊丹（華族）重賢	千枝	慶應元年（1864）11月	大正13年（1924）12月19日	60

五　輪　塔		下台石	上台石	地　輪	水　輪	火　輪	空＋風	全　高
23	横	181.9	118.9	118.9	70	61	―――	
2　代	奥	182.2	119.8	119.8	―――	61	―――	203.9
正　室	高	27.9	24.8	24.8	32.5	34.0	49.0	
33	横	―――	59.2	54.2	42	53	―――	
	奥	―――	60.7	53.7	―――	53	―――	135.2
長　信	高	―――	17.7	26.9	24.5	24.1	42.0	
34	横	―――	59.4	54.3	42	53	―――	
	奥	―――	60.4	54.8	―――	53	―――	136.8
同　室	高	―――	16.6	26.8	25.2	25.4	42.8	
35	横	―――	54.8	49.5	41	54	―――	
初　代	奥	―――	54.8	48.8	―――	54	―――	131.5
安　順	高	―――	12.7	24.4	25.5	26.7	42.2	
36	横	―――	55.3	48.9	39	54	―――	
	奥	―――	54.2	46.9	―――	54	―――	128.9
同　室	高	―――	12.3	23.6	23.2	25.8	44.0	
37	横	90.8	79.4	56.5	42	56	―――	
2　代	奥	67.3	67.8	56.7	―――	56	―――	183.6
茂　辰	高	33.1	17.4	36.7	29.7	27.7	39.0	
38	横	90.8	79.1	56.4	41	56	―――	
	奥	67.4	67.4	56.7	―――	56	―――	183.9
同　室	高	32.8	17.0	36.4	29.6	27.4	40.7	
39	横	188.5	94.0	56.6	44	58	―――	
3　代	奥	72.7	68.8	56.6	―――	58	―――	210.5
茂　矩	高	38.8	33.4	38.0	31.2	27.1	42.0	
40	横		94.3	56.5	44	58	―――	
	奥	同台石	68.9	56.5	―――	58	―――	210.6
同　室	高		33.4	38.2	31.3	26.9	42.0	
41	横	103.3	95.4	57.2	43	59	―――	
4　代	奥	74.7	68.4	56.6	―――	59	―――	204.3
茂　文	高	30.2	34.3	39.2	29.2	28.6	42.8	
42	横	104.2	94.4	57.4	42	59	―――	
	奥	78.4	68.8	56.4	―――	59	―――	204.1
同　室	高	30.2	33.7	38.6	29.3	30.3	42.0	
43	横	103.1	95.5	57.5	44	58	―――	
6　代	奥	75.7	68.6	57.7	―――	58	―――	198.3
茂　明	高	27.5	31.4	38.8	29.9	28.2	42.5	
44	横	102.7	94.6	56.8	41	58	―――	
	奥	75.8	68.2	57.1	―――	58	―――	198.5
同　室	高	28.5	30.4	38.3	28.5	30.0	42.8	
54	横	131.3	85.9	59.0	45	60	―――	
7　代	奥	128.4	81.4	57.2	―――	60	―――	195.9
茂　堯	高	16.5	35.0	41.6	31.7	29.0	47.0	

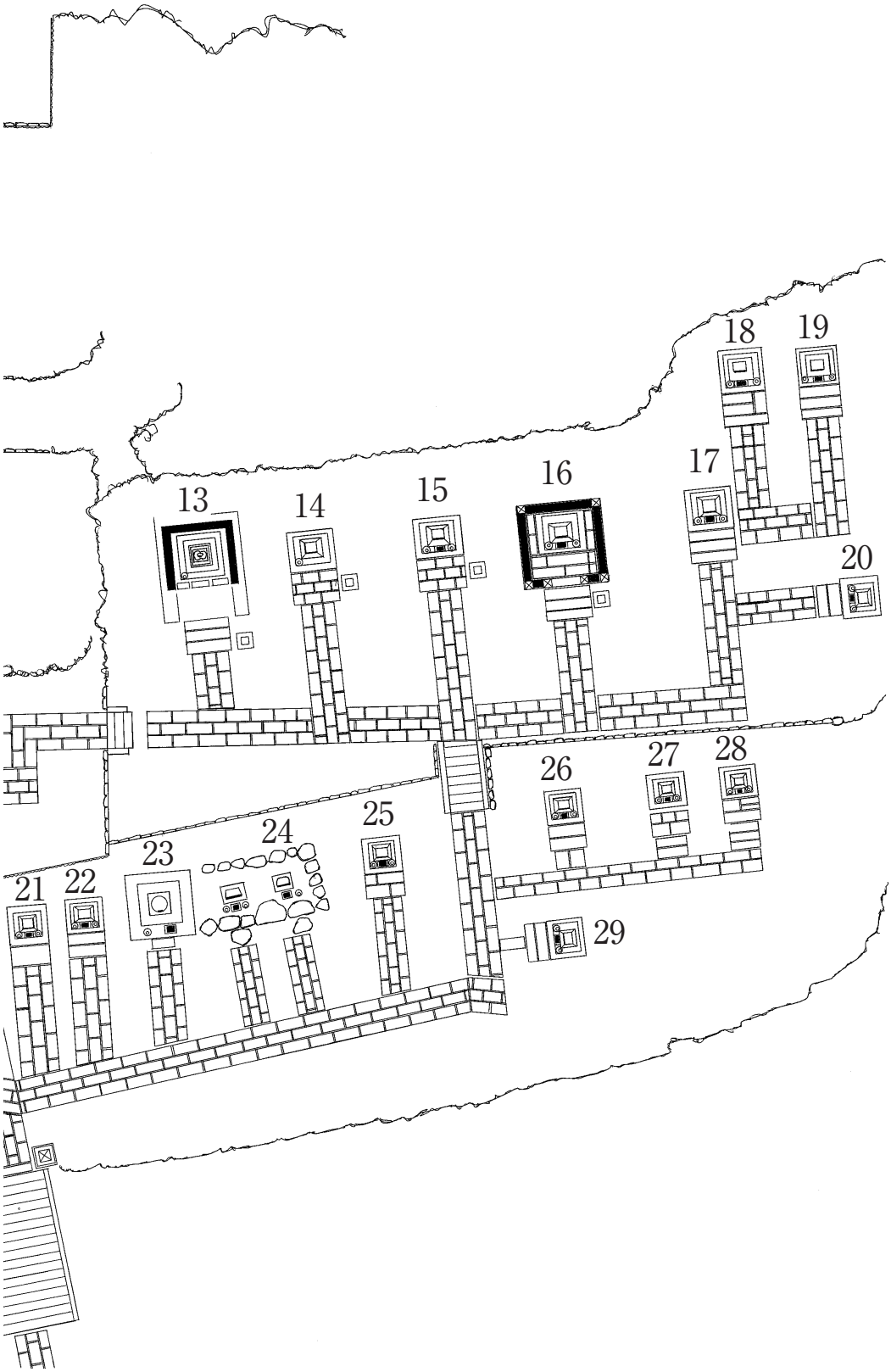
【備考】
横・・・横幅　　数字は、墓碑番号
奥・・・奥行　　単位は、センチ
高・・・高さ　　空＋風　空輪＋風輪

長方形A型		下台石	中台石	上台石	塔　身	全　高
12	横	182.0	130.2	79.9	50.2	
7　代	奥	169.3	121.0	75.1	44.0	281.0
茂　堯	高	33.6	38.8	44.7	163.9	
11	横	181.7	129.2	79.7	50.3	
8　代	奥	168.5	119.8	75.5	44.2	277.9
茂　孝	高	32.9	37.3	46.1	161.6	
7	横	181.8	130.5	80.8	50.9	
9　代	奥	168.2	118.0	74.7	45.4	275.6
茂　鄰	高	32.7	36.4	42.4	164.1	
6	横	179.2	127.9	80.2	50.1	
	奥	169.0	118.3	75.2	45.4	275.7
同　室	高	31.8	36.4	44.2	163.3	
5	横	179.2	128.6	80.2	50.9	
10　代	奥	174.7	123.3	74.7	45.8	276.4
茂　澄	高	34.4	36.4	44.9	160.7	
8	横	129.8	97.4	63.9	36.6	
	奥	124.4	91.4	56.6	30.5	195.3
金　体	高	12.5	29.9	33.8	119.1	
9	横	130.6	95.0	62.2	35.9	
	奥	124.8	91.1	56.4	30.6	207.3
柏樹軒	高	29.3	30.1	32.9	115.0	
10	横	131.6	97.5	62.5	35.7	
	奥	110.5	80.0	54.9	30.4	199.4
心　操	高	20.2	29.6	33.7	115.9	
14	横	129.9	97.2	62.5	35.7	
	奥	113.4	79.7	54.8	29.6	192.4
洞源院	高	11.0	30.3	32.8	118.3	
15	横	131.6	97.1	62.7	35.4	
	奥	112.9	80.3	54.9	30.2	204.6
春盛院	高	24.0	30.4	33.7	116.5	
16	横	132.3	97.0	62.2	35.8	
	奥	112.1	78.5	54.2	30.6	198.9
桂　林	高	21.2	29.6	33.7	114.4	
17	横	129.7	96.4	63.2	35.4	
	奥	120.4	91.9	58.0	31.6	201.4
蓮　臺	高	18.4	32.1	32.6	118.3	
18	横	126.9	94.3	62.6	34.3	
	奥	120.8	88.1	55.7	26.9	190.5
玉　相	高	17.0	27.9	33.4	112.2	
19	横	128.0	95.6	66.2	35.8	
	奥	120.4	87.6	61.0	30.2	203.7
秋　光	高	19.0	32.3	33.6	118.8	
20	横	111.9	77.6	50.8	33.3	
	奥	104.3	69.1	45.3	27.1	162.8
松　山	高	13.4	23.2	30.0	96.2	
21	横	107.6	75.9	49.8	32.9	
	奥	105.4	69.4	47.1	27.1	164.3
梅　含	高	16.4	22.7	30.6	94.6	
22	横	107.4	75.7	51.3	33.2	
	奥	98.0	68.7	44.4	27.6	168.1
龍光院	高	19.0	24.1	30.8	94.2	
25	横	104.9	74.7	51.8	32.7	
	奥	98.7	69.5	44.5	27.6	170.5
電　影	高	23.0	23.6	30.3	93.6	
26	横	102.9	73.1	52.0	33.3	
	奥	97.7	66.0	45.5	27.3	158.8
梅　唇	高	15.0	21.2	30.0	92.6	

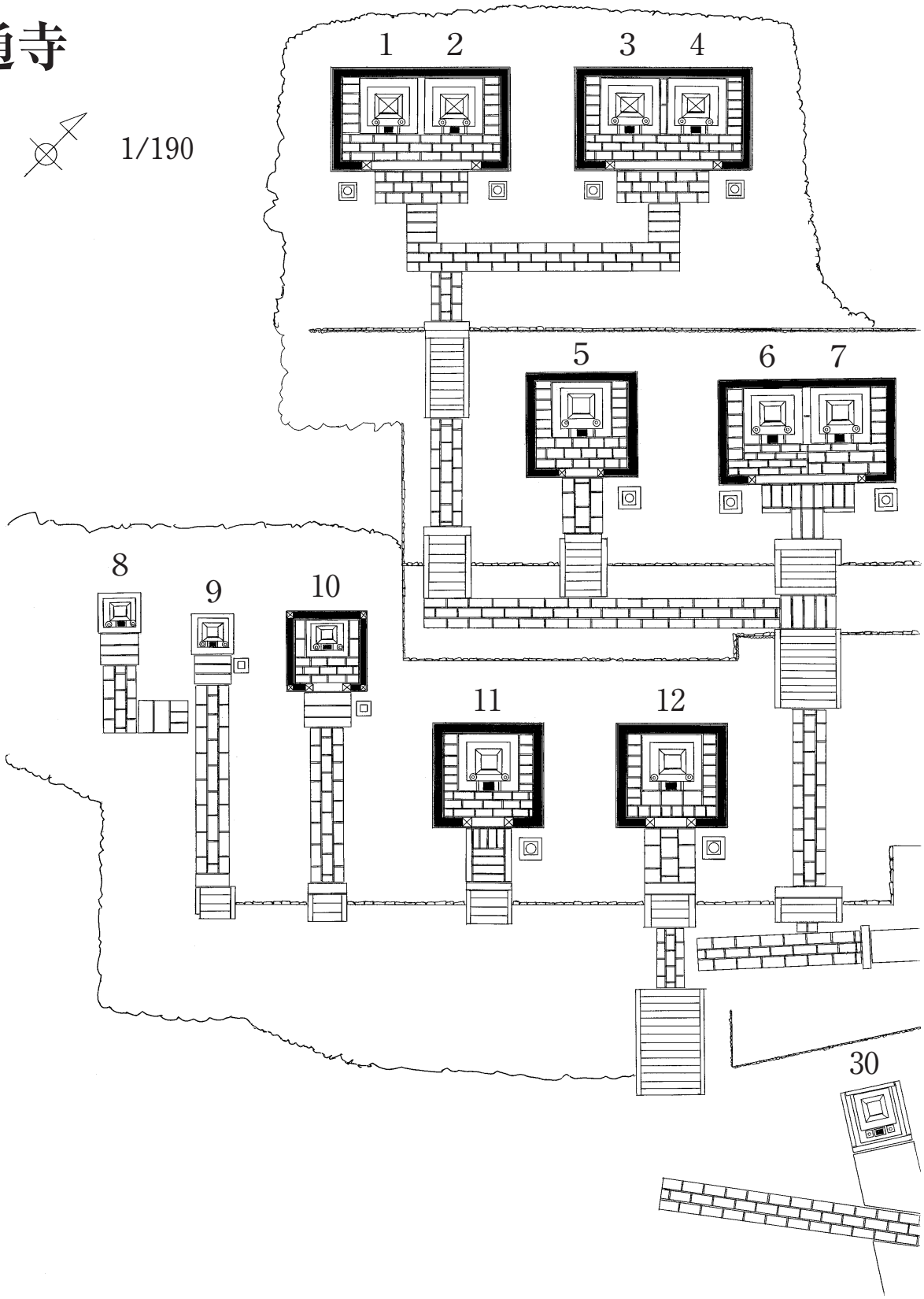
長方形A型		下台石	中台石	上台石	塔　身	全　高
27	横	106.6	74.1	51.7	32.6	
	奥	96.6	68.9	45.5	28.2	152.3
江春軒	高	15.4	21.6	25.9	89.4	
28	横	102.4	73.4	42.8	27.2	
	奥	91.0	64.0	36.6	21.9	119.3
春　林	高	13.0	18.4	22.7	65.2	
29	横	107.4	75.9	48.5	33.1	
	奥	100.3	71.9	42.7	26.8	167.7
無　相	高	20.0	23.1	30.2	94.4	
32	横	103.0	75.2	51.4	32.7	
	奥	97.2	69.6	44.8	28.2	170.2
養心院	高	25.0	23.0	28.7	93.5	
45	横	129.5	97.3	62.9	36.7	
	奥	124.2	91.3	56.6	29.5	191.2
俊　應	高	12.0	29.6	33.1	116.5	
46	横	101.6	73.5	52.7	30.6	
	奥	98.7	67.7	46.7	24.8	151.8
梅　園	高	13.5	23.6	30.5	84.2	
47	横	131.2	99.6	63.9	36.4	
	奥	112.2	81.4	54.6	30.7	202.6
大智軒	高	22.0	29.5	32.7	118.4	
49	横	139.6	95.9	66.9	41.9	
	奥	108.3	81.7	60.8	35.7	226.6
微笑軒	高	19.0	30.5	39.3	137.8	
50	横	132.4	98.7	64.1	36.1	
	奥	113.3	81.8	53.3	31.7	193.8
蓮泉軒	高	15.0	30.4	31.8	116.6	
51	横	106.8	75.9	53.6	33.0	
	奥	99.5	67.1	47.7	26.8	169.9
春　光	高	14.4	24.0	30.9	100.6	
52	横	103.5	74.5	52.1	32.1	
	奥	97.8	68.0	46.0	26.0	158.6
桂　萼	高	14.0	24.7	31.2	88.7	
53	横	103.1	74.7	52.0	32.6	
	奥	97.0	68.5	46.5	26.4	158.5
心　操	高	12.8	24.2	29.9	91.6	

角　　石		下台石	上台石	塔　身	全　高
30	横	106.9	71.3	41.3	
	奥	104.4	72.1	39.0	169.1
多久家	高	32.7	40.7	95.7	

長方形B型		下台石	中台石	上台石	塔　身	全　高
4	横	181.7	130.0	81.7	51.7	
11　代	奥	166.7	120.0	75.2	45.2	279.5
茂　族	高	31.5	34.7	48.2	165.1	
3	横	180.4	129.0	82.0	51.8	
	奥	166.1	120.5	74.1	45.4	279.3
同　室	高	31.8	34.8	48.4	164.3	
2	横	176.9	127.4	82.3	52.1	
12　代	奥	166.3	118.7	76.4	46.0	284.6
乾一郎	高	29.9	35.8	50.0	168.9	
1	横	176.9	127.4	82.5	52.8	
	奥	166.4	118.4	76.8	46.4	289.1
同継室	高	30.3	36.1	51.1	171.6	

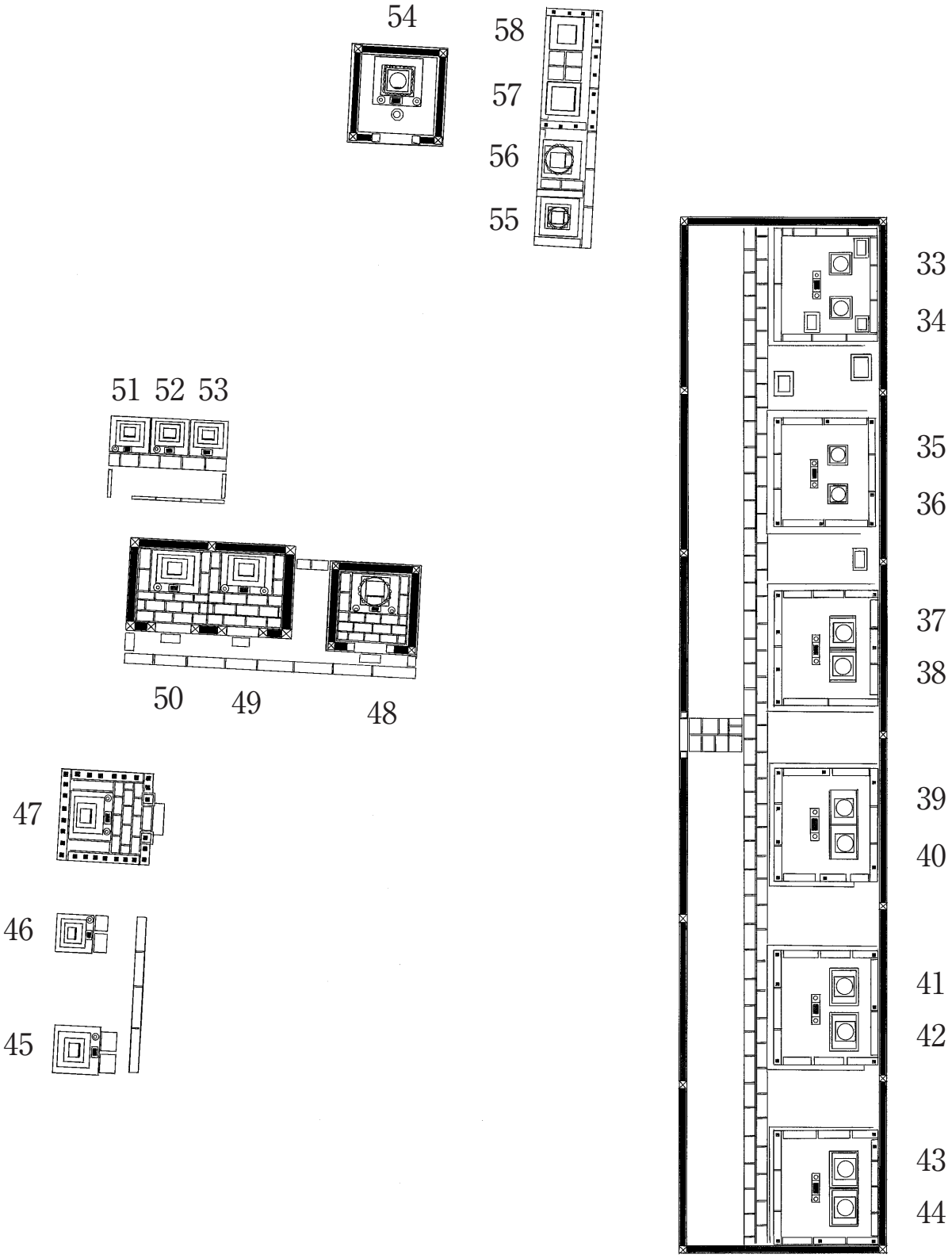

13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29

円通寺

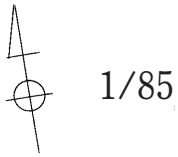


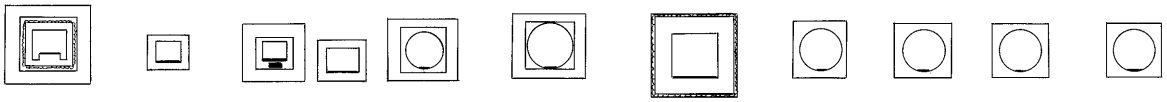
慶闇寺

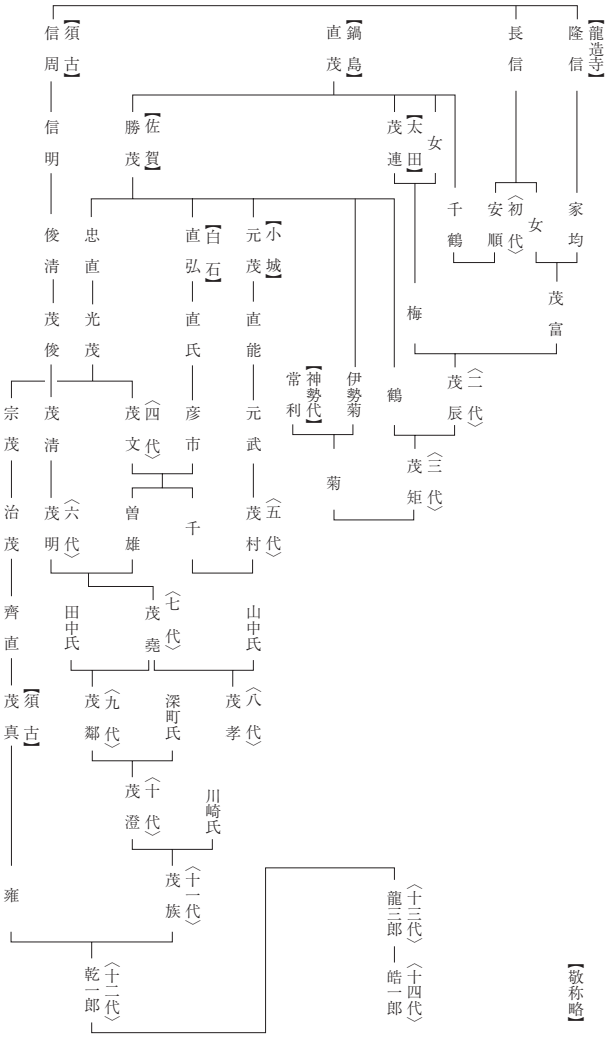
1/165


54
58
57
56
55
51 52 53
50
49
48
47
46
45
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

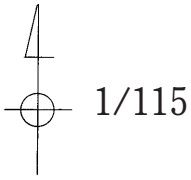
龍雲寺



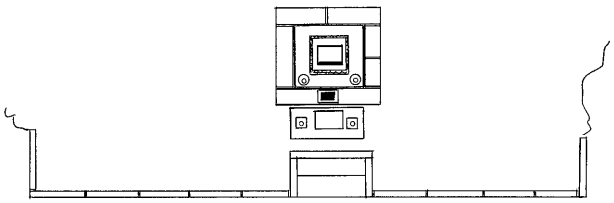




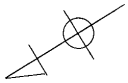
宝蔵寺

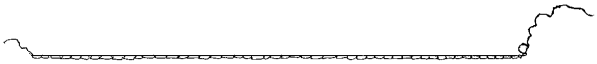


31

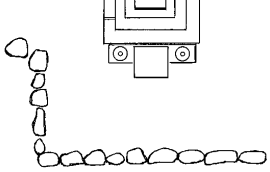


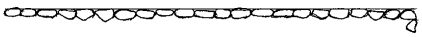
地福寺





32





3

11代茂族室雍　圓通寺

2

12代乾一郎　圓通寺

1

12代乾一郎室千枝　圓通寺

6

９代茂鄰室勝　圓通寺

5

10代茂澄　圓通寺

4

11代茂族　圓通寺

9

柏樹軒　圓通寺

8

金体幻性　圓通寺

7

９代茂鄰　圓通寺

12

７代茂堯　圓通寺

11

８代茂孝　圓通寺

10

茂鄰女直　圓通寺

15

茂明女稲　圓通寺

14

茂堯女利恵　圓通寺

13

茂堯女林　圓通寺

18

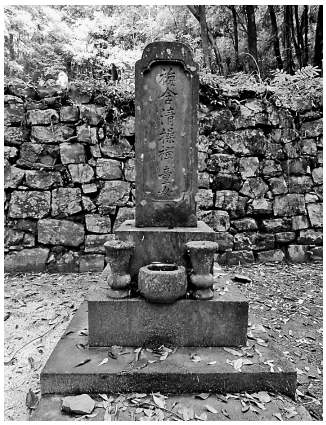
茂族男榮吉郎　圓通寺

17

蓮台妙花　圓通寺

16

桂林幻香　圓通寺

21

梅含清操　圓通寺

20

茂族男千松　圓通寺

19

秋光素月　圓通寺

24

長信　圓通寺

23

２代茂辰室鶴　圓通寺

22

茂文女以久　圓通寺

27

江春軒　圓通寺

26

梅唇玉露　圓通寺

25

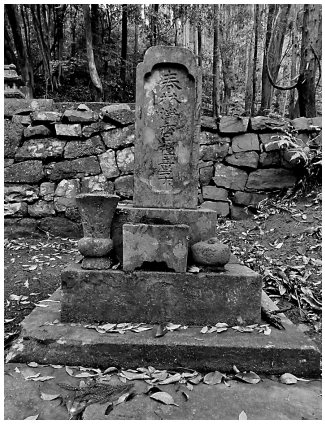
電影　圓通寺

30

多久家墓　圓通寺

29

無相了圓　圓通寺

28

春林浄香　圓通寺

33

長信　慶閤寺

32

茂堯女林　地福寺

31

４代茂文生母　宝蔵寺

36

初代安順室千鶴　慶閤寺

35

初代安順　慶閤寺

34

長信室　慶閤寺

39

３代茂矩　慶閭寺

38

２代茂辰室鶴　慶閭寺

37

２代茂辰　慶閭寺

42

４代茂文室彦市　慶閭寺

41

４代茂文　慶閭寺

40

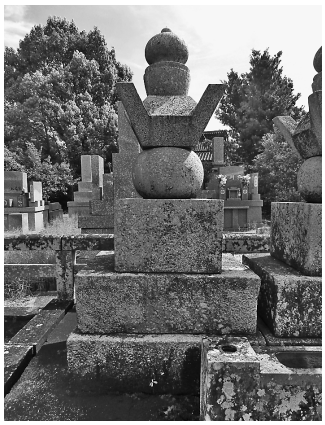
３代茂矩室菊　慶閭寺

45

茂族男騏三　慶閭寺

44

６代茂明室曾雄　慶閭寺

43

６代茂明　慶閭寺

48

茂明女柏　慶閭寺

47

茂鄰男兼照　慶閭寺

46

茂鄰男豹吉　慶閭寺

51

茂鄰男勇雄　慶間寺

50

茂鄰男亀吉郎　慶間寺

49

茂堯男兼寛　慶間寺

54

７代茂堯　慶間寺

53

茂鄰女直　慶間寺

52

茂堯女伊都　慶間寺

61

茂富　龍雲寺

60

初代安順室千鶴　龍雲寺

59

初代安順　龍雲寺

63

茂富男長昌　龍雲寺

62

茂富室　龍雲寺